
俺の妹はヤンキーっぽい美少女である

迷彩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の妹はヤンキーっぽい美少女である

【Nコード】

N3253Y

【作者名】

迷彩

【あらすじ】

ヤンキーっぽくて口調も態度も荒い。けど実はブラコンで甘えん坊な妹を持った主人公の日常をグダグダ書き殴った物語。
リア充爆発しろな話にしたい。

妹のヤンキーっぽさはすぐ崩れる(前書き)

遂にやってしまった。反省はしているが後悔はしていない
つまりなく感じたらどうかブラウザのバックを押してください

妹のヤンキーっぽさはすぐ崩れる

朝だ。

ただの朝ではない。

今日は……………月曜日なのだ

いや、だから何だっけ話なんだが。月曜日の朝ほどやる気の出ないものはそんなになんないと思う。

月曜日の前日である日曜日が学生のほとんどが休みであるからこんなにかつたるい気分になるのだろうか？

前日に惰眠を貪った分、また面倒な日々が始まると感じられる朝……………少なくとも良い気分にはならない筈だ。

自分がもう少し朝に強い人間であるならこの気分ももう少し良いものなのかもしれないと一瞬思ったが、起きる時間を考えるとむしろ自分は朝に強い人間だろうから関係無いのだろうかと思いなおす。

……………というかい加減起きますか。

○

現在時刻 AM 4 : 0 0

普通の学生が起きる時間としては大分早い時間だと思う。

まあ朝練のある部活をしている&家が学校から遠いとかそんな事情があればこんな時間に起きたりもする学生もいるかもしれないが、俺は帰宅部であって朝練など無い。

それならどうしてこんな時間に起きているのかというと……

バン！

「おい兄貴！ さつさと起きろ！ ランニング行くんだろ！？ 飯も作るならもう起きる時間だろうが！！」

妹の世話をしなければならぬからだ……

ああ、正直これだけでは意味が分からないし、お前説明する気あるの？ って言われても文句は言えないからちゃんと説明するつもり。

1、俺は妹の為に毎朝1時間ランニング&筋トレ等のトレーニングをしなければならない

2、俺は現在家にいない両親の代わりに家事をしなければならない

つまりこういう事である。

あれ？……このままだとまた説明不足だな……すまない、説明とかは苦手なんだ。

……えーと、1の妹の為に体を鍛えるってのはやんちゃな妹を体を張って助けられる為って事で、

2の両親の代わりってのは、今は両親が海外にいるためで、（少し詳しく言うなら父親が単身赴任 母親が家事のできない父を心配して付いて行った）妹も家事ができない今、唯一家事のできる俺が朝早くから料理の準備をしなければならぬからだ。（妹の家事能力は酷い。おそらく父親の遺伝なんだろうな……。）

以上が俺がこんな朝早くに起きる理由である。

「おい兄貴聞いてんのか！？ 起きてんだったらさっさと着替えて走りに行けよ！ 兄貴が遅れたら飯も食えなくなるんだからよ！」

ちなみに何故 my sister が俺の部屋に来ているかというと、今妹が言った通り俺のランニングが遅くなると朝飯ができる時間が遅くなって、下手をすると朝飯が食べられなくなる……いや、流石にそれは無いか？とりあえず俺が作る食事は食えなくなるが学校に行く途中にあるコンビニで買えばいいわけだし。

何故か俺の妹は朝飯は俺が作った物が良いらしく、店で買った惣菜物とか俺の手が入っていない物（冷凍食品とかレトルト物とか）を食べると酷く機嫌が悪くなるのだ。

……まあ、正直これは悪い気はしない。
可愛い妹が自分の料理しか食べたくないというのは結構うれしい
ものだ。

妹が中々の美少女であるというのも一役買っている。

ちなみに何故こんな時間（午前4時）にこの子が俺の部屋に来て
いるのかというと、前日の夜に夜更かししていた俺がちゃんと起き
ているのか確認しに来たのだろう。

起きていなかったら起こしてくれたんだらうな！。

……朝目覚めたらそこには美少女の顔とかリア充っぽい？

もう少し目が覚めるのが遅ければ月曜の朝特有の気だるさなど無
くハッピーな気分で起きたものを！　いつも通りに目覚める我
が肉体が憎い！！

「……おい兄貴聞いてんのか？　無視か、あたしの事無視してん
か！？」

……無視しないでよおおにいちゃん……あたしの事嫌いになっちゃ
ったのお……？」（メソ）

ちよっおまつ！

「あー無視してないって、少し考え事してただけだから！　お前の
事を嫌いになっただけでも無いし嫌いになるわけ無いから！」

こんなに愛しい妹を嫌いになるなんてとんでもない！

「……ほんとう？　きらいじゃない？」

よしよしよし、なんとか泣くのは回避できたな

「ああ！ 嫌いじゃ無いとも！」

「じゃああたしの事好き？」

「ああ好きだ、大好きだよ」なでなで

まったく・・・可愛い奴だ、頭を撫でてやろう

「……………バツ、バツカじゃねえの！？ 妹に大好きとか言ってるじゃねえよ……………つか撫でな！！」／／／／／／

……………本当に可愛い奴だ。

これで普段は荒っぽい言動をしていてヤンキーっぽいと言われて
いるなど誰が思うだろうか？

この姿を見た人間はそのギャップと可愛さに心を奪われてしまっ
に違いない。

……………俺限定でしか見せない姿だけど、これは勝ち組と考えていい
んだろうか？

妹のヤンキーっぽさはすぐ崩れる（後書き）

何か直すべき所があれば感想にどうぞ。

ただし作者の心は硝子でできているため、あまりキツイ言い方はやめてね。

中傷とも取れる物は無視、あるいは削除させていただきます。

改行で間を開け過ぎていたので修正&本文の一部を微修正

・・・それにしても適当に書き殴ったがちゃんとできているだろうか？

自分ではよく分からないから中々不安になるのだけれど

俺と妹の一日の始まり（前書き）

この作品は作者の妄想をグダグダ書き連ねていくだけの作品です。
気に入らなかつたりした方は素直に戻るを押してくださいな。

俺と妹の一日の始まり

さてさて、とりあえず日課のトレーニングを終わらせて家に帰り、シャワーで汗を流す。

そうすると時間も少々経っているのでそろそろ朝食の準備をしないといけない。

我が家の朝食は基本的にご飯、味噌汁、卵焼きの和食セットか、トースト、スクランブルエッグ、サラダの洋食セットを交互に作る。

まあ大体がそうだということだけであってその時の気分で変えたりと自由にやっているんだけどね。

今日は別に変わった物を作る様な気分でも無いし、昨日は洋食セットを作ったので味噌汁の準備だ。

「このくらいの料理はあいつも作れるようになって欲しいもんだがなあ……」

そしたら兄妹で交互に作れるようになるし俺の負担も減るんだが。

「まああいつはちゃんとした掃除ができるようになったばかりだし今はまだいいか」

……そう、そういえばまだ一度も名前が出ていない我が妹の事は、

つい最近やっと掃除ができるようになったばかりだ。

それまでは散らかすだけ散らかし、それを片づけるようなことはせず全部俺に丸投げ。

それを注意すればただ一言「うつせえ！」とだけ言い放って逃げて行く。「去って行く」ではなく”逃げて行く”ので、あの子どもこのままでは駄目だというのは分かっていたようだが……どうしても甘えてしまい直す気にならなかったのだろう)

流石にずっとこのままでは駄目だと思い、雫に言う事を聞かせる禁断の一言である「言う事を聞かないと嫌いになるぞ?」と言ってやっと直す気になったのだ……まあその一言を聞いた途端泣きながら掃除の仕方を聞いてきた雫を泣き止ませて、そこから掃除道具の場所やら使い方やら掃除の手順やらを説明し、失敗して涙目になる雫をなだめて繰り返し教え直し……とあまり順調には行かなかったが。

まあそもそも2・3日ですぐ出来るようになる物では無いしなあ。
(俺が求めるのはちゃんと彼女が自分だけの力で最後まで行い、その後部屋を見れば”綺麗だ”と思えるような清掃能力であるからだ。そもそも掃除以前に散らかした物を片づけるという事すら出来て無かったし)

結構な期間をかけてなんとか清掃能力を身に着けさせたのだ。
それまでは家事能力どころかマイナスの奴に一から教えて、ちゃんと力が付いたのだから成功したと言えるだろう。

そこからすぐに料理にまで手をつけるのはまだ駄目だろう。
別に今すぐ身に付けなければこの家はお終いだあ! ってな状態でもないし、流石にまた「嫌いになるぞー」と言ってしまう事を聞かせ

るような真似はしない。

俺だつてあの子を進んで泣かせようと思つてゐるわけでは無いのだ。

何よりそんな連続で新しい事をやらせてもやる気がでないだろうし、強引にやらせてもちゃんと身に付かないだろうしな。

……妹の成長と今後の教育方針を考えている間に料理ができたよ
うだ。

思考に耽つている間にも俺の体は動き続けていたらしい。

流石にここ何年間続けただけの事はある。

我が友人に「君は立派な主夫だな」と言われるのも無理は無いの
だろうな……。

あの時は否定したが自分でもそう認識してしまうのはどうなんだ
ろうか……。

○

さて、料理も完成したし我が愛しい妹を起こしに行くでしょう。

どうせ俺を起こしに来た後二度寝しているに違いない。(そもそ
も俺は起きていたが)

まあすることも無いのに4時に起きても寝るしか無いだろうから
仕方ないけど。

「おーい、雫ー？ もう7時だぞー起きなさいー」

シーン……

どうやら完全に熟睡しているようだ。

まあ4時に起きてからすぐにまた眠れたとも思えないし仕方ないだろう。

中途半端に起きてから眠るとどうしても起きるのは遅くなるしな。とはいえ、寝坊させるわけにはいかないし……

仕方ない、直接起こすしかないか。

「零一？ 部屋入るぞー」ガチャツ

一応声を掛けて部屋に入る。割と大きめの声で言ったがまだ起きはしないようだ。

零一の部屋は普通のヤンキーっぽい雰囲気とは違って、とても女の子っぽい内装をしている。

黄色いクマのぬいぐるみや大きな丸い耳が特徴なネズミのぬいぐるみ、耳の大きなゾウの様な動物のぬいぐるみなど、某夢の国の住人達が多い。

……というのは嘘である。

何かのキャラクターだとか、そもそもジャンルが決まっているわけでも無く、とにかく沢山のぬいぐるみであふれ返っているのだ。

実はあの子に掃除を教えたのは他の家事をしながらこの部屋を掃除するのがかなり大変だからだったりする。

時間が経つとすぐに埃が溜まるし、ぬいぐるみを退けて掃除してもそれを元の場所に戻すのが大変なのだ。

どうやらそれぞれの配置が決まっているらしく、場所を間違えると怒られてしまう。

何とか場所を覚えても雫の気まぐれで配置が変わられたりすると目も当てられない事になるしなあ。(というかよくこの数のぬいぐるみの配置を覚えらるな……)

これでも昔のように節操無く買い漁ったりしなくなった分まだ楽になった方なのだが、これを機に自分で掃除させようという事になったわけだ。

「やばい、またどうでもいい事を考えて時間が経ってしまった……」

早く起こさないと味噌汁が冷めてしまうしね。

雫のベットに近づいて行く。

「スウー……スウー……んー兄貴……」

ん？ 俺の夢でも見てるのか？ これは気になるな。

妹が兄をどう思っているのか分かるかもしれん。

少し様子を見よう……今日は料理が早く出来たし時間には余裕がある(味噌汁が冷めたらまた火を入れればいい。そんな手間は俺に

対する評価に比べればどうという事は無いしな)

「んう・・・美咲が兄貴を獲物を狙う野獣の目で見てる・・・兄貴はあたしが守って・・・んう・・・あにゆきい・・・うへへ・・・へ・・・」

三点リーダーが多いわ！　じゃなくて俺に対する評価じゃ無かったようだ。ちよつと残念。

そして後半は聞かなかつた事にしておこう……

ちなみに今出てきた美咲^{みれい}というのは雫の数少ない友人であり、俺の後輩でもある女の子だ。

肩まで伸ばした黒髪に口元の黒子が特徴でかなり大人びた子である。

荒っぽい言動をとる雫に恐れずに近づき、あの子の友人になってくれた中々しつかりした子であり、俺は美咲ちゃんと呼んでいる。

美咲ちゃんの御蔭でクラスで浮いていた妹はクラスに受け入れられたらしく、その時は雫も嬉しそうにしていた(実際はかなりツンデレっぽい態度をとっていたが、ある意味分かりやすい)

俺に対する評価では無かつたし、いい加減起こすでしょう。

まずは閉まっているカーテンを開けて太陽の光を部屋に入れる。

その後雫が寝るときにいつも抱いているイルカの抱き枕を抵抗を押さえて取り上げながら一言、

「いらあー！　朝だぞ雫！　起きなさい！！」

まるでお母さんみたいだと自分で思った。

「うー後5時間……」

「長いわッそんなに寝てると遅刻するだろうがッ！」

阿呆な事をぬかしたのでぬいぐるみの代わりに掴んでいた掛け布団を強引に奪ってやる。

その勢いで my sister は『ドスッ』と鈍い音を立ててベットから落ちた。

「……何すんだ馬鹿兄貴！ ベットから落とす事ねえだろ！ 痣でもできたらどうすんだよ！」

「大丈夫だ、問題無い。というかお前の体に痣を作る様な事を俺はしないし、その高さで痣を作るほどお前の体は軟くない」

「あたしが起きるのが遅くなったのは兄貴を起こすために早く起きたからじゃねえか。もう少し優しく起こしてくれよ……」

んー……確かにそうだったかもしれない。

いくら寝が阿呆な事を言ったとしてもそもそも悪かったのは昨夜夜更かしをして今朝ちゃんと起きれるか心配させた俺だし、ベットから落とすのは流石にやりすぎだったか……。

「あー、確かにやり過ぎだった。すまん。お詫びに今度何か言う事

「1つ聞くから許してくれないか？」

「え、マジで？ それって何でもいいのか？」

「ああ、俺ができる事なら何でもいいさ。……でも常識的な範囲で頼むぞ？」

「そうか、何でもいいのか……何を頼もうかなあ……一緒に寝てもらうとか……」ブツブツ

「あー考えるのは後にしてくれ。とっとと着替えて降りてこい、飯食って学校行くぞー」

「はいはい分かったよ、じゃあ着替えるからさっさと出て行けよな！」「ゲイッ」

「おっとっと、すぐ出て行くって。そんな押さなくてもいいだろうに……」

さて、とりあえず味噌汁を温め直すとするか、ぬるい味噌汁を飲ませて怒られたくないからな。

「こんなぱつと見て日常の些細なやり取りも、また新しい一日が始まったという実感を与えてくれる大切なものなのであった。」

俺と妹の一日の始まり（後書き）

相変わらず短いのは仕様。

ちなみに主人公が夜更かししたのは単純にネットで二次小説を読み漁っていたから。

それで寝坊しても自業自得だね。

俺の学校生活（前書き）

この作品は作者の妄想をグダグダ書き連ねていくだけの作品でござる。

気に入らない事があつたりしちゃう方は戻るを押してください。

俺の学校生活

妹と二人で食事を取る。

今まで何度もあつたいつもの光景だ。

「兄貴、ご飯お代わり」

「あいよ」

雫は女の子の割に結構な量を食べる。

……正直太らないのが疑問だが、そこはこの子の問題だろう。
今までそれで太りはしなかったしな。

「それで雫、今日も放課後は部室か？」

「もぐもぐ……ごくくつ そうだよ。兄貴も来るんだろ？」

「まあ他にやる事も無いし構わんがそろそろ部活っぽい事をした方が良くないか？」

「別に良いじゃねえか。今までそれでやってきたし、あたしは今を気に入ってるしなー」

我が妹は部活に入っている。

その名も護身術部

何だそれ？と思うのも仕方がない。

この部は雫が作った部活だからだ。

部の活動内容としては名前通り、護身術を習うものだ。

別に何を習うか決まっているわけではなく、ただ自分の身を守れるように鍛えようっていうものでしかない。

部員は部の創設者であり部長である雫と部員である俺、美咲ちゃ

んの3人だけで、そもそも人数が一人足りないため”部”ですら無く、”同好会”となっているのだが。

というか格闘系の部活は既に、

- ・柔道部
- ・空手部
- ・合気道部
- ・ボクシング部
- ・テコンドー部
- ・レスリング部
- ・相撲部

……と、正直俺もあまり把握できてないから全部は言えないがパツと思いついただけでこれだけあるのだ。

マイナーな物も加えればもっと沢山の格闘系の部活がある事だろうし、部長である雫がまともに部員の勧誘をする気が無く、部の宣伝すらしていないためそもそも護身術部の存在すら知らない人間の方が多いただろう。

……というか俺の友人以外で知っている奴は全然いないと思う。

そもそもさっき言った部活内容も建前でしかなく、道場があるわけでもないのに、(元々まともにやる気がなかった雫が道場の使用申請をしなかったため)ただ部室に3人で集まって喋ったりするだけのものか無い。

これって護身術部じゃなくて休憩部じゃね?と何度も思ったもんだ。

実際に部活の名前に合うような事は全くしてないし。

「せめてもう一人くらい部員を確保した方がいいんじゃないか?」

つと同好会じゃ格好付かん気がするんだが」

「もぐもぐ……ごくくつ 別に良いじゃねえか。あたしと兄貴、それと美咲の三人がいればさ。同好会だからって潰される訳じゃねえしよ」

「確かにそうだけどな……」

まあ無駄にデカイ学校だからその分部屋が余ってるのは当然なわけ……

というか護身術を学ぼうと思ってる人間は合気道部とかに行くだろうし、入る人間は早々いないか……

そもそも新入りが入る可能性があったとしても雫が怖いだろうし……雫が知らない人間の入部を歓迎するわけないし、雫を知っている人間は基本雫を怖がっているからなあ。

……部活(?)の事を考えていたせいで食事があまり進んでいない、いい加減ちゃんと食べ始めよう。

「ごちそうさま」

「ってはや!？」

「いや、あたしが早いんじゃないかって兄貴が遅いんだろ?また何か考え事してたのか?」

「いやいや考え事はしてたけど俺が遅いなんて事は……」

ってかまだ食べ始めてから20分しか経って無……って20分!?? わーお、思ったより時間が経っていたようだ。

また無駄に思考に没頭してしまった……。

「じゃああたしは先に行つとくからなー!」ガチャッ

どうやら雫は行ってしまったようだ。

……待っていてはくれませんよねー……。

仕方ない、急いで食事&戸締り等の出発準備を済ますとしよう。

○

学校に着いた。

俺や雫の通う学校はかなりでかい。

どの位かと言つと……とりあえずバカみたいにデカイと考えてくれ。

朝も言った通り俺は説明とかが苦手なんだ。スマン。

それよりもとつとと教室に行くとしよう、朝色々手間取ったのもあつて時間があまり無い。

キーンコーンカーンコーン……

つてヤベエ！ダツシュだぜえええええええええええええええ……

○

「ゼエ……ゼエ……死ぬ……嘘……死にはしない……俺は……ミラクル……」

何とか間に合いました。

超絶疲れたけど。

校門に入った直後に本令の鐘が鳴ってそこから靴を履き替え、割

と遠い校舎まで行き
階段を上る。

それをずっと全力疾走で行ったせいでかなり疲れた。
……担任が少し遅れて来たおかげで助かった。

「あーこれより出席を取るから、元気に返事するようにー」

しかし危なかった。

俺のクラスは遅刻すると鞭で叩かれ……はしないが、担任が英語教師な為英語の課題プリントをやらされる&英語の成績の意欲・関心の部分にマイナス評価が付くのだ。
クラスというか担任教師の方針だな。

普段の態度はやる気なさげなくせに、その態度に見合わないシビアナ評価を付けやがる。

まあその分クラスに何らかの形で貢献するとプラス評価を付けてくれるし、まともな学校生活を送っている生徒にとっては割と良い先生だ。

俺だって今日は少し遅れかけたけど普段は余裕を持って登校してるし。

「瀬川ー、瀬川はいないのかー？返事が無いって事は欠席でいいんだなー」

おうふ、ヤバい呼ばれてるじゃないか。

「あーすいません先生。瀬川十夜出席してまーす」

「おーいたか……ったく、次はもっと早く返事しろよー？」

「すんません」

……そういえばずっと名前を言って無かったな。

俺の名前は瀬川せがわ十夜とおやだ。

これからよろしく頼む。

俺の学校生活（後書き）

お気に入り登録をしてくれている人がいる……だと……？
良いんですか、こんな駄文を登録しちゃって？

こゝ、こゝこ後悔すすするんじゃねえぞコノヤロウ！

……登録ありがとね、ありがと。

俺と妹の昼休み（前書き）

この作品は作者の妄想をグダグダ書き連ねていくだけの作品である。

気に入らん事がある奴は大人しく戻るをpushのDA!。

- 場面の移り変わり
視点変化

俺と妹の昼休み

午前中の授業が終わって昼休みである。
昼食は購買で買う事もあるけど基本俺が作った弁当だ。
雫にも俺が作った弁当を持たせている。

「さて、それじゃあ食べますかね」

登校する時全力疾走したのもあって余計に腹が減ったぜ。

「あ、十夜。僕も一緒に食べていいかな？」

「ん？聡里か。勿論良いぞ」

こいつの名前は明石聡里あかし さとし同じクラスだ。

俺の友人で僕っ娘、背中の後ろまで伸ばした綺麗な茶髪をしてい
る。

感情をあまり表情に出さないし、本人も一歩引いたように人と接
するせいかあまり人との付き合いをしない奴だ。

しかも何故か女なのに男の制服を着ているという変な奴だ。

普通女子は可愛いって人気なウチの制服を着るんだが、ど
うしてこいつは男子の制服を着てるんだろうか？もしかして実は男
の娘だったとか？

……いや、こいつ自身が女だって言ってたしな。

「……何か失礼な事考えてない？」

「滅相もない。俺がそんな事を考えるとと思うか？」

「思う。……具体的には僕の服装とか性別とか」

即答ですか。

「まあとりあえず弁当を食べようじゃないか」

「誤魔化したね……まあいいや、さっさと食べよう。僕は購買で買ったパンだけど」

「俺の作った卵焼き食うか？」

「貰えるなら貰うよ……（パクッ）ん、相変わらず良い腕してるね」
「日々の努力の積み重ねだな」

「それと愛情かい？」

「ああ……勿論だ。元々妹のために作ったついでだからな。美味しくできるよう努力するに決まっているじゃないか」

「（相変わらず妬けるね……もう）まあその”妹さんへ”の愛情籠った美味しい卵焼きを分けてもらってるんだ、さっき失礼な事を考えていた事は帳消しにしてあげるよ。」

忘れてなかったのか……しかも何か嫌みつたらしい言い方をするのは何故だ……

「というか俺が失礼なことを考えていたつてのは確定なのか？」

「そうだよ。君の考えている事は分かるんだ。僕に対する事限定でね？（最も……僕を”女”として意識していないつて事も分かっちゃうんだけどね……絶対女として意識させてやる……フッフッ）」

うお！何だ！？何か背中にゾクツと来たぞ！！

「……流石、名前が”さとり”なだけあるな」

「君が僕について考える事だけだつて言ったでしょ？それに人間の考えが全部読めても楽しくないと思うんだけど」

「確かにそれはそうだな……つてか俺の考えてる事を読むのは楽し

いのか」

「僕について考えている事”だってさっきから何度も言ってるじゃないか。”僕の能力”と言うより”乙女の能力”だよ、あと楽しいね」

「乙女の能力ねえ……男の制服着てる奴が言う事か？」

「だってスカートも可愛いとは思うけど、あれってスースーするじゃないか。階段降りるときの下から来る男子の視線が煩わしいし、座る時も一々スカートを気にしてすわるのも面倒だしね」

「ふーん（そんな理由かよ）……まあ別に似合ってるしいいか……ごちそうさん」と

「会話の締めを”似合ってるから”で済ますなんて……御馳走さま」と

「何でもいいだろ実際似合ってるし、ボーイツシュって奴？」

「はあ……もう良いよ……卵焼きありがとね。時間も迫ってるし、僕は自分の席に戻るよ」

「お、もうそんな時間か。楽しい時間はあっという間だな」

「た、楽しいだなんて……フツツやっぱり君は天然ジゴロってやつだね（ボソツ）」

「ん、何か言ったか？」

「何にも言って無いよ」スタスタ

こうして昼休みは過ぎて行くのだった……

さーてやっと退屈な授業が終わったぜ。

早く兄貴が作った弁当たべよーっと。

「あら雫ちゃん。授業じゃ死んだように寝てたのに、終わった途端に起きるなんて流石ね？」

あ？誰だ……ってあたしを”雫ちゃん”何て呼ぶのはあいつしかいねーか

「美咲か。お前も一緒に食うか？兄貴の作った弁当はやらねーけどな！」

「もう、一口くらいくれたっていいじゃない。いつも美味しそうに食べるんだから味が気になるのよ」

「そんなこと言ったって本当は兄貴の作った料理を食いたいだけだろうが！？これは兄貴があたしの為に作った弁当なんだから絶対やらねーぞー！」

「（もう……十夜先輩の作った料理を毎日食べられるなんて羨ましいわね）……分かったわ。今回は諦めますよーだ」

ふん、どうせ明日も欲しがらくせに……兄貴はあたしのだ……あにきい、あにきの愛情が詰まった弁当おいしいよお……えへへえ……。

「（凄い良い笑顔しちゃって……また十夜先輩の事考えてるのね。いつもこんな笑顔をしてたらもつとすぐ受け入れてもらえたでしょうに。元々可愛い顔してるスタイルもいいから羨ましいわあ……ま、最初は十夜先輩目的で近づいたけど、彼女自身とは良い友達になれたし何よりこんな可愛い笑顔が見れるんだから役得って奴ね……うふふ）」

うお！何か背中にゾクツてきたぞ！？何だってんだ……って

「あ……弁当食べ終わっちゃった……」
「別に家に帰れば先輩の作った料理を食べられるんでしょう？そんなに残念に思う事無いと思うけど」
「家で作ってくれる料理からも感じられるけど、弁当にはまた一段と兄貴の愛情が感じられるんだよ！」
「そ……そうなの……（また凄いブラコン度合いを見せてくれるわね……）」

兄貴はあたしの為にトレーニングの後で疲れた体に鞭うっていつも美味しいごはんを作ってくれるんだ。
朝ごはんだけでも手間が掛るのに、弁当も作ってくれるなんてやっぱり兄貴は優しいんだ！
弁当を作らずに購買で買って食べるっていう手もあるのに、兄貴は自分から弁当も作るって言うてくれたんだ。

兄貴……好きだよ。
まだこの気持ちか兄妹としてか異性としてかは分からないけど……きつといつか答えを出して見せる。
だから……その時まで待っていてくれよ……。

キーンコーンカーンコーン

「栗ちゃん？チャイム鳴ったし早くお弁当片付けなさいよ？私も席に着くから」
「わ、分かってるよ！」

ちくしょう……良い感じで終われると思ったのに……。

余談だが、十夜と雫の背中にゾクツと来たのは全く同じタ
イミングだったりする。

俺と妹の昼休み（後書き）

どううでもいい事ですが、感想受付の制限をなくしました。
ユーザーでは無い方も感想を書く事ができます。

そういえば人物設定とか書くべきなのだろうか？

……まあまだそんなに話数も無いしいらないか。

あ、一話のタイトルを修正しました。

俺と妹の放課後（前書き）

この作品は作者の妄想をグダグダ書き連ねていくだけの作品ですよ。

自らの意向に沿わない部分がある方は戻るを押す事をお勧めしますわ。

俺と妹の放課後

やっと今日の授業が終わった。
だるいわー英語本当にだるいわー……。

「お疲れ様。分かっていたけど本当に英語が苦手なんだねえ君は。」

「ああ、だって文法がどうかわけが分からんし、そもそも学校で習う程度の英語が本当に役立つのかすら疑問だったのに長文の読解なんてやらされたら気力がもたんよ……」

「テストの時はまた僕が教えてあげないと駄目なんだね?」

「ああ、頼むよ。俺の力じゃ勉強の仕方すら分からん。まあ赤点すら回避できればいいからさ」

「仕方ないなあ……ま、テストが近づけば教えてあげるよ。君は今から護身術部に行くのかい?」

「ああ、行かないと妹に怒られるからな」

ただ3人で集まってくつちゃべってるだけだけどなー……

「そうか、じゃあ行ってらっしゃい（僕ももう少し運動神経があれば入部するのに……）」

「おー行ってくるわー」

じゃ、行くとしますかね。

○

「へーいお兄さんがやってきたぞー後輩達よー」ガチャッ

……ってあれ？雫がいない。
いつも俺より早く来てるのに。

「雫ちゃんなら今日は掃除当番ですよ、十夜先輩」

「……俺に言わなかったってことはあいつ忘れてたのか？」

「はい。授業が終わってすぐここに来ようと思いましたけど、今日は月曜日ですからね。当番交代を忘れてたんでしょう」

ウチの学校は放課後に掃除をする。

一週間決まった場所を掃除して、週が済んだら別の人と交代するのだ。

「掃除がある事を知って慌てて掃除場所に走って行きましたよ。」

早く終わらせて兄貴に会いに行くんだー！』って」

「そこで掃除をサボらずにちゃんと行く所が偉いよなあ」

あいつはヤンキーっぽいけど実際のヤンキー（この場合は不良の方が合ってるか？）とは違うからな。

「まああの子の事ですしすぐ終わらせてきますよ」

「じゃあ俺はそれまで読書するけど美咲ちゃんはどうする？」

「そうですね……じゃあ先輩。膝枕してもらっていいですか？」

え？

「すまん、耳がおかしくなったみたいだ。もう一度言ってくれ」

「うふふ……先輩、膝枕してください」

「……マジで？」

「マジです」

まあ別に良いか、膝枕ぐらい。
ただ眠たくて枕が欲しいだけなんだろう。
寧にも何度かしてるしな。

「分かった君の好きにしてくれ」

「じゃあ先輩、少しお借りしますね」ぼすっ

そう言うやいなや美咲ちゃんは俺の太腿に頭を乗せた。

「男の膝枕なんか硬いだけだろうに……」

「そんな事ありませんよ、気持ちいいです。（先輩の膝枕……ああ
私今幸せだわ。何事も言ってみる物ね）」

「つてか美咲ちゃん眠いのか？俺の膝枕なんて」

「（もう、相変わらず鈍感ですね……）さあ、どうでしょうね？」
「俺はこのまま本読むからな」

「はい、先輩はそうしてください（それにしても先輩の膝枕安心す
るわ……このままじゃ、本当に眠っちゃう……かも……）」ZZZ
ZZZ

あ、本当に寝ちまった。

眠かったんだな……可愛い寝顔してんなあ……。

つとと、寝顔を見るのは失礼かな？大人しく読書しましょうかね。

10分後……

「（ううー思ったより遅くなっちゃった……）兄貴ーいるよなー？」
ガチャッ

「あいてっ……うー何で兄貴の膝枕で美咲が寝てんだよ……あたしだって最近やってもらって無いのに……」

「いや、何か美咲ちゃんがして欲しいって言うからさ……」

「だったらあたしにもしてくれよ！」

「あっああ分k「絶対だからな!？」分かったって……」

全く甘えん坊な奴だ……お？

「うーん…何ですか…うるさいですね……」

どうやら美咲ちゃんが起きたようだ。

「おい美咲！何でお前兄貴の膝枕で寝ようと思ったんだよ!！」

「あら、雫来たのね。そんな事決まってるじゃないの……うふふ」

「ちくしょー…ちくしょー…（あたしも家で膝枕してもらえらるうけどやっぱり悔しい……ってそういえば!）……おい、兄貴!」

「うお!な、何だ?」

だからいきなり大きな声を出すんじゃないっての……

「今すぐ帰るぞ！早く帰って膝枕してもらっからな!」

「あ、ああ……俺は良いが……」

美咲ちゃんは どうするんだ？

「あ、それなら私も帰りますね？今日は良い思いもできましたし……うふふっ」

「（つく、美咲め……。笑ってられるのは今のうちだからな!）兄貴、今日の朝何でも命令聞くて言っただよな?」

ん……？なんの事……ってああ、雫をベットからおとしてやりすぎたお詫びにーって奴か？

命令じゃなくて言う事を聞くって言ったんだが……まあそれはいいか。

「ああ、確かに言ったが……決まったのか？」

しかもこのタイミングで？

「ああ、今決まったよ……ずばり、あたしの命令は【今日の夜一緒に寝る事】だ！」

「な、なんだってー！？」

いや、お前……

「高校一年生にもなってそれはどうよ……」

「べ、別に良いだろ！？……それとも、あたしと寝るのは嫌か……？」(じわっ)

な、潤んだ目で上目遣いだと！？

「べ、別にかまわん！一緒に寝てやろう！！」

「な！？男女が同じ布団で眠るなんて不純です！」

何か美咲ちゃんが俺より動揺してるっぽいんだが……何故に？

「いや、別に兄妹だし構わん」それでもです！！バカなんですかあなはは！？」お……おっ

何か怒られた……（・・）シユン

「（あ、可愛い……じゃなくて！）だめよ雫ちゃん！私は認めないわよ！！」

「はん！美咲に認められなくても関係無いんだからな！……兄貴はいいんだろ？」

「（・・）……え？ああ、構わないけど」

「ほらな！あたしは兄貴と寝るんだよ！ほら兄貴、すぐ帰るぞ！」
「ダッ」

そう言つと雫は俺の手を取つて走り出した。

勿論俺と自分の分の荷物をもつて。

「くっこれで勝つたと思わないでよ雫ちゃん！」

「じゃーなー！アツハツハツハツハツハッハー！！」

俺の手を握りながら中々の速度で走る雫の笑い声がうるさい。

つてかいつの間にか大分部室から離れてる。

聞こえるか微妙だけど一応言つておくか……

「じゃーなー美咲ちゃん！また明日ー！！」

また明日ー！

あつという間に離れた離れた部室から、かすかに美咲ちゃんの返事が聞こえてきましたとさ。

俺と妹の放課後（後書き）

何だか知らないけど、昨日は2011 1 1 1 1 1 1 でポッキーの
日だったらしいね。

……自分はポッキー買わないからいいけど。

俺と妹の帰宅後（前書き）

この作品は作者の妄想をグダグダ書き連ねていくだけのモンです。
自分の気に入らんとこがある奴は戻るを押したほーがええんとちや
ういますか？

俺と妹の帰宅後

「よっしゃー着いたー！」

家に着いたと同時に雫がそう叫んだ。

というか

「お前一体どうしたんだよ、何かテンションおかしくないか？」

俺と寝る事になってからずっとこんな調子なんだが……
そんな嬉しがる事なのか？

「いや別に膝枕だけでも嬉しいのにそれ以上に兄貴と一緒に寝れるのが嬉しいとか、そんな事はないんだからな！ホントだぞ！？」

何というあざといツンデレ。

だがこれを天然とするのが my pretty sister
の恐ろしい所である。

夜一緒に寝るっていうお願いの時も涙目上目遣いという高等テク
ニツクを使ってきたからな……まあそれは別にいい。

可愛い姿を見れてラッキーとしか思えないし。

あの後俺達兄妹はあつという間に家に着いた。

雫に手を掴まれた状態でずっと走っていたせいか手が痛い……
何度も離してくれって言ったのに何故か離してくれないし。

「兄貴、膝枕はいつしてくれらんだ？」

「あーそうだなー……」

今日は帰ってくるのが早かったし、晩御飯は昨日の肉じゃがの残りがある。

「ご飯も冷凍してあるからそれを温めたらいいか……」

「ってあれ？やる事がほとんど無いじゃん。」

精々ほうれん草のおひたしを作る位か？それもすぐできる物だし。だったらほとんど（全くと言っていい）時間が掛らないし、今やっても大丈夫だな。

「今日は飯の準備もほとんどする事が無いし、今からでもいいぞー」
「マジで！？やった！」

「でも美味ちゃんみたいに寝ちまうなよ？夜眠れなくなるからな」
「えー別に良いじゃん。どうせ兄貴が起こしてくれるんだろ？」

「お前なあ……… だったら明日起こす時は水でも……… いや、ベットが濡れるから氷をぶっかけてやろうか？それならお前も一発で起きれるだろ」

「うーっ！分かったよ……寝ないようにするよー（どうせ今日は兄貴と一緒に寝れるんだからな……えへへ。兄貴の匂いと温もりに包まれて寝る……想像するだけで最高じゃねーか！）」

「分かったならよろしい」

さてとそれじゃ……… っつて

「お前が俺の太腿の上に乗るって事は、俺は動けないんだよな？……」

「…… だったら俺は何をしてればいいんだよ………」

「本でも読んでればいいんじゃないのか？」

「いや、あれは今日読み終えちまったからな………」

読み終わったのは今日の放課後だけど、昨日一昨日に大分読み進めてたし、授業の合間の時間にも読んでたし。

晩飯の用意の必要がほとんどないから、1時間位は時間があるんだが……その間ずっと手持ち手持ち無沙汰でいるのか？

雫の学校生活は普段こいつから言ってくるし、本当にやる事がない。

読んでた本の次の巻はまだ発売してないし。

「ってかお前は俺の太腿に頭乗せてるだけで暇じゃないのか？いや、そもそも1時間膝枕してるなんて事無いよな……？」

「えー別にあたしは兄貴の膝枕で1時間とか余裕だぜ？マジで」

………えー、マジで？

「俺の太腿が大変な事になりそうなんだが……」

人間の頭は結構重たいんですよ？

「なんだよ、兄貴はあたしと1時間も一緒にいるのは嫌なのか！？」

………いやなのかよ………（メソ）

「ちよ、おま！？」

何だこの既視感デジャヴは！？

朝にもこんなことあったじゃないですかーやだー！

………というかお前そんな泣き虫でしたっけ！？

「分かった、分かったから。1時間ぐらい大丈夫だよ、それに嫌なんて事もないさ。可愛い妹なんだから一緒にいるのが嫌なんて事は

無いさ」

「……うん、わかった。じゃあ膝枕して？話してる間に時間たっちゃったし」

「わかったよ、全くうちのお姫様は甘えん坊だなっ」と

「お姫様！？あたしにお姫様なんて似合わねーよ！……それに夜は一緒に寝るつても忘れんじゃねーぞ！」／／／／

だから大声を出すなっ……。

何だかまた雫のテンションがおかしくなってきたので、強引に頭を太腿に乗せてやる。

……これで大人しくなるかな？

「うわっ……あ……んむ……にゅ……（あ、兄貴……）」

お、大人しくなったな。

「……………」

あれ……なんか動かなくなっただぞ？

「おーい雫さん？どうしたんだー？」

……………ZZZZZZ

「おーい……って寝てるじゃねえか！（ベシッ）」

ついさっき寝ないようにするって言ったばかりだろうが！

「う”っ……いてーな……なにすんだよお……」

「お前は何を寝てるんだっさつき寝ないようにするって言っただろっ！」

「そ、そんなの兄貴の膝枕が安心するのが悪いんじゃないかっ！あ

たしは悪くねえ！あたしは悪くねえ！悪いのは全部兄貴の太腿だ！」

逆ギレですかー！？

「いやいや太腿が悪いって何だ！筋肉痛か何かか！？」

「いやその突っ込みはおかしいと思うんだけど……」

「大体聖なる焰の光みたいなキレ方すんじゃないよ、ってか何故知
っている？」

「え……兄貴がやってるのが面白そうだったから……それにアニメ
もやってたし……」

「……はあ、やめよう。何か論点がずれてきたし、無駄に疲れたわ
……」

「そうだな……」

この間ずっと膝枕状態です

そして、そこからはゆったりと時間がすぎて行った……お互いに
会話はなかったけど決して悪い雰囲気ではなかったし、こんな時間を
を過ごすのも悪くはないだろう。

○

気が付くといつの間にか1時間経っていたようだ。

お互いに喋らず、眠った訳でもないのに1時間も経つとは……正
直驚きだ。

「よし、それじゃあ時間だし晩飯の用意するか。秉、テーブル拭い
て皿出してくれ」

「……ん、分かった」

さて、まずはほうねん草のおひたしを作るかね……

兄妹とまつたりとした時を過ごした、まる……いやまあ夜は一緒に寝るけど。

俺と妹の帰宅後（後書き）

ミ○トンミックスフルーツ味を炭酸水で割って飲むと美味しい。

なんで○ルトンかって？

……カ○ピスより安いからさ。

俺と妹の夜（前書き）

この作品は作者がノリと勢いでただただ妄想を書き書き殴っていきだけの物です。

「それでもおk」と言う方はどうぞ宜しく願います。

俺と妹の夜

「それじゃあ雫、風呂の掃除をしてくれるか？俺は皿を洗うかな」

「分かった兄貴……………風呂も一緒に入るか？」

「はいはい冗談はいいから行ってきなさい、それに女の子が男と風呂なんて駄目だろうが。夫婦でも無いのに」

「へへっ分かってるよ、行ってくるぜー（せっかく勇気を出して言ったのに……………別に兄貴とならいいんだけどな……………）」

「たく、一瞬ドキッとしちまったじゃねえか……………流石に風呂は駄目だろう。」

……………まあ一緒に寝るのも駄目だと思いが、今更止めようなんて言ったら涙目どころか本気泣きしそ^{マツ}うだしなあ。

「あの子もいつかは誰かの嫁に行っちまうのかねえ……………」

お兄ちゃんは許しませんよっ！どこの馬の骨とも分からん男のもとに行くだなんて！！

まさに父親的思考である。

あの子は美少女だ。

綺麗な金髪を後ろで結び（ポニーテールって奴だな）、背も結構あっっておまけに胸もある。

街を歩けば10人中9人は振り向くだろう。残りの一人はホモな本人は好きな男とかいないみたいだし、今のところは大丈夫だろうが……………いつかはそんな時もくるのかなあ……………。

「ま、そう簡単に妹はやらんがな」

うちの可愛い妹が欲しければ、まず俺を倒していくがいい。
これでも喧嘩は強いぞ？

……よし、皿洗い終了。

二人分の食器を洗うのなんてすぐ終わるしな。

兄貴ー！風呂掃除終わったけどもうため始めんのかー！？

ん、あっちも終わったか。

んー風呂が沸く時間も考えればもうため始めたらいいかな？

「おー！スイッチ押しといてくれー！」

分かったー！

さて、風呂を待ってる間に干してた洗濯物でも取り込むか。

○

「んー　んーんんー」

鼻歌を歌いながら洗濯物を畳む。

普通雫くらいの年になれば父親や兄弟と一緒に選択されたりするのは嫌だと思いが、雫はそついうのを気にしない。

……流石に下着を畳むのは自分でやるが。

『　』
お風呂が沸きました』

ん、どうやら風呂が沸いたようだ。

「おい、早く！？風呂溜まったけどお前先に入るのかー！？」

兄貴が先に入っといってくれー！

ふむ、どうやら学校の課題が何かでもやってるみたいだな。

「分かったー！俺が先に入っておくー！」

ちなみに俺はそういう課題が出た時は授業の後の休み時間（教室移動時間ともいうが）に進めて置いて、家ですぐに終わらせるようにしておく人だ。

家事もほとんど終わらせたし、風呂から上がったら残りの家事と一緒に終わらせるとしよう。

「さて、入りますかー」

「えーっとここは………？」

晩飯を食い終わった後、あたしは二階の自分の部屋で今日の宿題（課題）をやっていた。

内容は数学の教科書にある問題をノートにやるのと、英語のプリントだ。

正直あたしはあんまり頭がよくない。

まあ授業で寝てばかりなせいなんだけど、元々頭がよくないからだ。

だからよく兄貴に勉強を教えてもらっただけど……兄貴は数学と英語は全然できない。

だからこの二つは自分でやらないと駄目なんだけど……

「だー！駄目だ、よく分かんねー！」

くっそー……仕方ない、美咲が貸してくれたノート見るか……

あいつは頭がいいから、数学と英語は美咲によく教えてもらう。

……あいつは兄貴と逆で国語と社会が壊滅してるけど……。

「あー、美咲のノートわかりやすいな……あいつの方が教師向いてんじゃないか？」

美咲のノートを見ながらやったらすぐ終わっちまった。まだ英語が残ってるけど。

あいつはあたしに見せるの前提でノートを写すから注釈とかがついてて凄く分かりやすい。

今まで何度も教えてもらったから私の理解力を完全に把握されるし。

おーい雫ー！？風呂溜まったけどお前先に入るのかー！？

お、風呂か……まだ英語が残ってるし兄貴の後で良いかな？どうせすぐには終わらないし。

風呂あがってからまたやんのも嫌だしな。

「兄貴が先に入っといってくれー！」

分かったー！俺が先に入っておくー！

……さて、勉強の続きと行く前にあれを出しておかないとな……。

「ふう、良い湯であった……。」「

あーさっぱりした……やっぱり風呂はいいね、心も体も癒される。

「霏ー！風呂空いたぞー!?!」「

分かったー！

……さて、残りの家事と課題を終わらすか。
どっせすぐ終わるけど。

「 よっし、終わった!」「

あとはテレビでも見とくか。

○

『なんでやねん！それはおかしいやろ、なんでそんな位置にそれがくるんじやー！』

「……つまらぬ、最近の芸人はよろしくない……」

いや、こいつらがよろしくないだけか……？

まあつまらんチャンネルを変え

「あーさっぱりしたー！」

雫が風呂から上がったようだ。
パジャマ姿で入ってきた。

「あ、兄貴ー」

「ん、何だ？」

「寝ようぜー」

「はや！？」

いやいや俺はもうちょっとテレビを見て、そこからPCで二次小説でも見ようと思ってたんだが……。

「いいじゃねーか、さっさと寝ようぜ？別にベットに入ってからすぐ寝るわけじゃねーし（そんなすぐに寝ちまったら兄貴の匂いとか温もりが堪能出来ねーし……ってあたしは何考えてんだー！）」
／／／／

うお！何か真っ赤になって悶えだした！？

「おい、一体どうしたんだ……？」

「う、うづうづっさい！とっとうと行くぞ！！」ガシッ

「ちよ、おい！そもそもどこで寝るんだよ！？」

「兄貴は布団で寝てるだろ？だから落ちる心配もないし、でかめの布団使ってるし兄貴の部屋で寝る！」

「ちよ、おい！別にそんな無理やり連れて行こうとしなくても……
って聞けよ！？」

……そういつて俺の手を掴み、また俺は無理やり連れて行かれて
しまった。

俺と妹の夜（後書き）

さて、いつまでこの更新速度で行けるかね……。

俺と妹の就寝（前書き）

この作品は作者がノリと勢いでただただ妄想を書き書き殴っていくだけの物です。

「そんな駄文で大丈夫か？」と言う問いかけに「大丈夫だ、問題無い」と返答のできる方はどうぞ宜しくお願いします。

俺と妹の就寝

「そおい！」ブンッ

「うわっぷ！」ボスッ

痺め、布団に俺を投げやがった……っっていうか何で布団が敷いてあるんだよ。

俺はちゃんと畳んでから襖の収納に片付けた筈だぞ……。

「兄貴が風呂に入ってる間にあたしが出しておいたのさ……、とう
！」ボスッ

それはまた準備がよろしい事で……っって飛び込んで来るな!?

「んあー兄貴いー……（ギユウ）」

「ちよ、くっ付くな！」

「いいじゃねーか、膝枕の時は全然くっ付けなかつたんだからさあ
……」

えー我慢してたって事ですかー、そうだったんですかー。

「え、まさかこの体勢で寝るなんて事無いよな!？」

うつ伏せの上に乗られても寝れる気がしないぞ!?

「んー、確かにこの体勢じゃ兄貴の顔も見えないしなー……」

「いや、それ以前に掛け布団かかって無いから。今の衝撃で全部横

に行ったから」

「あ、兄貴の上に乗った時すぐ掛けれるように半分に折っておいたのが駄目だったかー」

「俺の上に飛び込んでくるまでの流れは全部計画通りかよ！」

「……言っとくけど、今更別で寝ようってのは無しだからな？（むぎゆう）」

「うぐっ、キツイ、力、強い、からっ」

痛い痛い、締まるっ腕が回されてるわき腹が締まるっ

しかも息がし辛くてキツイ！

「あとくっ付いて寝るのが駄目なんてのも無しだからな!？（ぐぎぎ）」

「わ、分かつ、た、わ、かつた、からっ、いいか、げんに、はな、

せっ!」

「分かつたならいい」

「ぜえ…ぜえ…とりあえず一端布団から出て、布団を綺麗に敷き直すぞ」

今の鯖折のせいで（それから脱出しようとしたせい）布団がグチャグチャになっちまった。

「仕方ねーなー……兄貴そっち持ってくれ」

「はいはい……これでよし、と」

「じゃ、改めて一緒に寝よーぜっ」もぞっ

「分かつたから少し落ち着けて……」もぞもぞ

そして今度こそちゃんとした体勢で布団に入った。

……ってか

「やっぱり狭いじゃねえか……」

「ベットよりはいいじゃねーか」

「いや、普通の仰向けで体の三分の一が出ちまってんぞ」

「じゃあお互いが横向きに寝れば良いんじゃね？」

「あー、そうするか」もぞ

「な、あたしに背を向けるんじゃねーよ！」

「いやいや、どういっつっちゃ。お前が横向きにすればって言ったんじゃねーか」

「そうじゃなくてっ、あたしの方を向けてって言ってんだよ！」

え“……”

「マジで？」

「マ、ジ、で！」

そんな強調しなくても……

「いやでもそれじゃあ唯でさえ体がくっ付いてんのに、お互いに真
正面なんか向いたら……」

だって今俺の背中に雫の顔（これは鼻か？）が付いてんだぞ！？

「いいから早くー！さっさと、こっち、向けっ」「ぐぐぐぐぐ……」

「うお！？」グルン

無理やり体を回転させられた！？

「えへへえ……あにきい……」ぎゅっ

「ちょ、おい、雫……」

そんな正面から抱きつくな……

俺と雫は身長差が10cmほどある。

そこから雫が少し下にずれてるせいか（多分雫が自分からずれたっぽい）、今雫の顔が俺の胸にうずめられている状態だ。

しかも雫は俺の背中に手を回しているから離れられないし、雫が俺の胸に顔を擦り付けているせいで色々辛い。

……何か腹の下あたりにとんでもなく柔らかい物が当たってるし……
……いかん！意識するな！妹に反応してしまっっては兄貴失格だ！！
……でも、こいつ良い匂いするな……。

「んにゃあ……あにき……あにきい……（兄貴の匂いがあ……んふふ、あにきのおいが……あー……、あにきあったかいよお……）スリスリスリ……」
「く……（やばい、ずっとこの状態は拙いぞ……どうすれば……）」
「んー……ねえあにきー……」

ん？何だ、俺の方を見上げて……ってかまた上目遣いか。
暗がりだっけ言うのも相まって異常に可愛いんだが……。

「あ、ああ、なんだ？」

「あたま、なでて？」

なんか凄い幼児退行してるー！？

「わ、わわわわ分かった」なでなで……

「ここは言う通りにはしておかないと……」

「んふー……、んー……ぎゅってして？」

くっまた上目遣いだと…!?!?
もうやめて!十夜のライフはもうゼロよ!!

……し、仕方ない。

ここでやらなければ幼児退行している雫の事だ、また涙目上目遣いでトドメを刺されるか、泣きながら鯖折かなんかをされる気がする…ってか絶対どちらかをされる!そんな未来が俺には見える!!

「ほ、ほら、ぎゅー……」

更に抱きしめながら頭を撫でてやればどうだ!?!これならば勝てる筈だ!(何にだ)

「んにゃー…んにゅう…はあ、おにいちゃん…わたしいましあわせだよお…」ZZZZZZ

寝た…か…。

眠る間際のおの口調、自分を『わたし』と言ったのも、俺を『おにいちゃん』といったのも……

「少しだけど、昔に戻れたんだな……」

俺も今夜は今まで以上にグッスリ眠れそうだ……

眠っている雫を右手で抱きしめ、左手で頭を撫でてやりながら、俺はそう思った……。

お休み、
雫。

俺と妹の就寝（後書き）

これは酷い。

元々酷いクオリティが更に落ちておりますぞ。

……こんな駄目な作者ですがどうかよろしくお願いします。

俺と妹の朝と過去（前書き）

後半はシリアス（笑）またはシリアルでいける。

……寧ろそれ以下の何かかもしれん。

回想

俺と妹の朝と過去

「んう…むにゆ…あむっ」かぶっ

「うーん…んむむ」

「んにゃー…んふー…はむっ」かぶっ

「ん？…んー」

「んちゅっ、ちゅー…」かぶかぶかぶ…

「ぐっ…んん？な…なんだ…？」

何だか耳に違和感を覚えて目が覚めた。

「一体何だって…あれ？」

何か前が見えないんだが…顔に何か当たってる？

柔らかくて良い匂いがして…ってまさか！？

「栗の胸じゃねえか！？」ボソッ

小声で叫ぶという器用な真似をして完全に目が覚めた。

それによってやっと大体の状況を察する…まだ前は見えな
いけど。

「あむっちゅっじゅるー」

…どうやら栗が俺の耳をしゃぶってるっぽい…

「…いつ、寝ぼけてやがる…」

おおかた飯を食べる夢でも見ているんだろう…

「(ちゅぽんっ)…んあー兄貴いー…あにきいー…」

あれー？俺の夢？何で俺の夢を見ると耳をしゃぶる事になるんだよ…あれなの？俺が雫の為に料理を振舞ってる的な…いやでも完全に甘がみされてるしな……

「とりあえず起きるか…よつと…おお！？」グイッ

起きようとしたら背中に回された腕にこもる力が強くなった。しかも自分の足を俺の脚に絡めてきたせいで完全に動けない。……せめて時間を確認したいんだが……。

「んあつあにき…だめえ…んふ」

何故か雫が嬌声をあげる…耳をしゃぶりながら。体を離すのは無理っぽいので、まずは雫が俺の耳をしゃぶるのをやめさせよう…さつきから耳元を舐めたりされるせいでずっとペチャペチャ音が聞こえていて、頭がどうにかなりそうだ。

しかも時折雫が「あにきすきい…」だとか「あにきだめえ…」だとか嬌声をあげるせいで、俺の息子が暴走しそうでやばい。妹に反応するなど許されない事だからな！

「よつと…む、いきなり離すのは無理か…ならば」

雫の頭を下に、つまり俺の胸の所に来るように体をずらそう。

「よーしよし、良い子だ……」

あまり無理やりやろうとするとぐずりながら抵抗されるので、頭

を撫でやりながら頭をずらしていく。

よし、上手く行った。

途中雫の口が俺の口と接触しそうになって焦ったけど、何とか回避に成功したぜ。

「さてさて時間はつと……まだ2時じゃねーか………」

まあ昨日は早くから寝たし、雫の耳捕食事件（ノリで命名）によって起こされたから仕方ないんだが、俺が起きるまでまだ2時間もある。

それまでどうするか……。

雫の頭を撫でてやりながらゆっくり考えよう

「んにゃー……おにいちゃぁん………」

……そうだな、雫が今のようにヤンキーっぽくなる前の事を考えよう。

昔まだ小学生だった頃、雫は虐められていた。

特に理由があった訳では無い。

強いて理由をあげるとすれば、雫が物静かで自分を表に出す事が苦手な女の子だったからだろう。

しかもこういう時期の子供は、相手が大した抵抗をしなければ調子に乗って更に酷い事をする。

最初はたまに机にちよつとした落書きを書いたりするだけだったのが、靴や筆箱など、物を隠したりするようになり、それから悪化して面と向かった暴言になり、最終的には暴力を振るうに至った。

当時の俺も何度か雫を庇ったりしたんだが、妹への虐無くすまでの事はできなかった。

学年自体が違ったし、その頃の俺は喧嘩が強くなり、虐めのリーダーをしている悪ガキが空手をしているのもあって自分よりも一つ下の子供を倒す事が出来なかった。

だから俺は強くなろうと思った。

雫を守るような強い男になろうと思った。

でも時間が無い。

雫は今虐められている。

そのリーダーの周りには3人の取り巻きがいたし、そいつらは別に強いわけでは無いが、単純に4対1という数の差は子供にとって覆しがたい差だった。

それでもやらなければならぬ。

勝てないとしても、毎日暗い顔をして学校に行く雫をこれ以上見たくなかったのだ。

せめて奴らに一泡吹かしてやりたかった。

前日のうちに消しておいた雫の机の落書きを見て、あいつらが放課後、また落書きをしようとした所に待ち伏せした。

何か策があった訳ではない。

俺はただあいつらに正面からぶつかっていった。

結果、俺は奴らにボコボコにされた。

いや、それより危険だった。

奴らのリーダーに殴られて、反撃しようとした所を後ろに回り込んだ取り巻きに突き飛ばされたせいで、俺は教室の窓ガラスに腕を突っ込んだのだ。

ガラスは割れ、しかも俺の手首がガラス片で切れてしまった。

手首にできた何故か白い傷口から、真っ赤な血が染み出るように溢れ出し、床に滴り落ちて行ったあの光景は今でも思い出せる。

その光景を見た奴らは小さな悲鳴をあげて逃げて行った。

学校のガラスを割った事と、何より俺の手首から滴り落ち、床に溜まっていく真っ赤な血に恐怖したのだろう。

窓ガラスの割れた音を聞いたのだろう、向かいの校舎の一回にある職員室から何人かの教師が駆け付けてきた。

そして手首から血を流し、体も殴られてボロボロな俺を見て、唯の悪戯では無い事に気付いたのだろう。

俺を一先ず保健室に連れて行き、事情を聞いてきた。

勿論俺は先生達に事情を話した。

……今まで何もしてこなかった教師も、事態を放置したせいで軽傷とは言い難い怪我人を出したとあつては動かすにはいられない。

直ちに虐めの調査が進められ、虐めをしていた4人は別の学校に転校していった。

手首の傷は10針縫う怪我だった。

幸い静脈を傷つけていなかった為命には何の問題の無いものだったが、その時の医者曰く「後数センチ横を傷つけていたら君は死んでいたかもしれないね。結構深く切ってるし、もし実際にずれていたら噴水みたいに血が出てきただろうねー」だそうだ……軽い口調で随分恐ろしい事を言われて、酷く背筋が冷たくなった事を覚えている。

勿論この事は雫の耳にも入った。

自分のせいで兄が下手をすれば命に関わるような怪我をしてしまったと思っただろう……あの子は酷く自分を攻めた。

……正直、その頃の自分が許せない。

妹を助けようとして、結局あの子を悲しませてしまった事に酷く自分の弱さを実感させられた。

雫も自分の虐められた原因が自分の弱さだと考え付き、口調や態度を変えた。

あの子にとっては、今のヤンキーの様な態度が強い物の姿だったのだろう。

子供の頭ではその程度が限界だ。

俺はもっと強い男になろうとして色んな格闘技に手を出し、妹を守りたいという俺の意思を知った両親も応援してくれた……何故か雫もボクシングをやり始めたのは誤算だったが……。

こうして俺は喧嘩に強くなり、雫は晴れてヤンキーの道を歩み始めたという事だ。

……まあヤンキーと言っても、喝上げとかはしないし、どっちかと言うとただ単に気が強くなって暴力を振るうようになっただけだし、しかも俺には甘えてきたりするので、可愛い妹であることには変わり無いんだがな。

俺と妹の朝と過去（後書き）

実は左手首の怪我は、実際に私が負った傷だったりする。

……原因は自業自得だけどね……。

そろそろ毎日投稿は出来なくなりそうですなー……地味に執筆時間が取れなくなって来ましてね……。

指摘された誤字修正

俺と朝の日課の鍛練（前書き）

まさかまたもや不慣れな描写をする羽目になることは……

戦闘描写なんぞ出来る筈があるまい……。。

俺と朝の日課の鍛練

さて、過去の事はもういいだろう。

今は俺も雫も元気にやってる…それで充分だ。

時間もそろそろトレーニングに行く時間が迫ってきたみたいだし、そろそろ布団から出るとしよう。

「んー…あにきい…」スリスリ

…まずは俺に頼ずりするのに夢中なこいつを何とかせんとな…。

という事で、さつき雫の頭をずらした要領で行くとしよう。

頭を撫でながら少しずつ体をずらし…その隙間にいつの間にか布団から出ている枕を…入れ、るっ！

「よし、後は体を抜けば…」

スルスル〜と…よし、行けた。

「ううーあにきい〜いかないでくれよ…」

え？起きてないよね…？寝言にしてはタイミングが…、もしかして俺の体と枕の感触の違いで気付いてんのかな…。

何か枕を抱きしめる力が凄い事になってるし。

さつきまで俺に込めてた力を『ぎゅ〜』で表すのなら、今は『ゲギギ…』って感じた。

人間なら骨が軋む音を聞く事になるだろう。

「ごめんな、トレーニング行ってくるからな」
「んー……………」ぎゅっ

また少しの間頭を撫で続けながらそう言つと、どうやら少し安心したようだ。

さっさと行ってさっさと終わらせるとしむじ。

「行ってきまーす」

返事の無い事が分かっていても、そう呼びかけてから家を出た。

○

「はっはっはっはっは……………」

規則正しい呼吸と規則正しいペースを心がけて走り続ける。

まず最初にするのは体力作りだ。

何事も体力が無ければやってられないというのは正しいと思うし、
そのためにはやっぱりランニングが一番だろう。

足腰も鍛えられるし。

「あらー十夜君じゃない。おはよー」

「あ、静音さんおはようございます」

この人は響静音さん。

俺がランニングしているようにこの人も毎朝散歩している人で、
何故こんな朝早くから散歩しているのか聞いたら「十夜君に会う為
に、時間を合わせているのよー」と、はぐらかされてしまった。

歳は分からないが（女性に年齢を聞くのは失礼らしいので聞いた事が無い）恐らく20代前半だと思われるかなりの美人さんだ。

一緒に走った事もあるんだが…その時は俺のペース（結構早い）に付いてきて、尚且つ話しかけて来るというかなりの体力を持つおねーさんだ。

「今日もランニング？関心ね〜」

「まあ日課ですからね……っというかそれ毎日言ってますね……」

「あらあら、そうだったかしら〜でも私は本当にそう思ってるのよ〜？十夜君みたいな良い子はあるまいから〜」

「いやいや俺より出来た人間なんていくらでもいるでしょうよ」

「も〜謙遜しちゃって…河原で別のトレーニングもしてるんじゃない？本当、良い男だと思っわ〜」

「静音さんみたいな美人さんにそう言ってもらえたらうれしいですね……というか、何で河原でトレーニングしてる事知ってるんですか？見せた事無いと思うんですけど……」

「あらあら〜…、ひ・み・つ（はあと）」

相変わらず読めない人だな……

「んー…何か十夜君から女の子の匂いがするわね〜」

なんですと？

「なんですと？」

口に出た。

「匂っわよ〜若くて可愛い女の子の匂いが〜」

まあ今日は妹と密着して寝てましたからね……とは言えない。

「もしかして〜彼女？彼女ができたの？ねえどうなのかしら、ねえ」
「？」

あれー？何だかいつものほんわりオーラが無くなったぞー？

……え？本当に何が起こった。

本気で怖いんだが。

「いや、多分妹の匂いじゃないかと……」

「ふーん？今まではそんなにしなかったのに？」

「えーとそれは……」

「それは？」

「それh『プルルルルルツ』うお！？……すいません、河原でのト
レーニングに移行しますんで！」ダッ

危ねー！ケータイのタイマーに救われたー！！

とりあえず全力でその場を去った。

「……あらあら、逃げられちゃったわ〜。それにしても慌てちゃって
可愛いわね〜……今度はちゃんと説明してもらおうよ？……んふふ
っ」

やばい、背筋にゾクツと来た……前にもこんな事あったよな……。

○

河原に到着した。

とりあえずさつきあった事は忘れて、トレーニングを始めようと思う。

まあトレーニングと言っても、唯の筋トレが主なんだがな。

「295…296…297…298…298…299…300…
と」

時間が有り余っているわけではないので、基本的な筋トレを各300回ずつするだけだ。

……こんな事を毎朝しているのは俺の周りには他にいないので、この回数が多いのか少ないのか良く分からないんだが……どうなんだろうか。

「さて、次だな」

これ以上回数を増やすと学校生活に支障をきたすんだよね……授業中に寝やすくなったりとか。

「まあ自分的にはこれで良いと思ってるし、これでやっていけるからいいだろ」

というかこれより早く起きるのは流石に無理だしな……。

「297…298…299…300」と…よし、筋トレ終わり！」

筋トレが終わったら、実際の戦闘の練習をする。

勿論相手がいるわけではないので、仮想敵を想像してするだけだ。実際に戦った不良たちを相手にした時の事想定して動く。

今回の敵は鉄パイプ持ち二人、ナイフ一人、素手一人だ。

一人いる素手はボクシングでもしているのかフットワークが素早く、拳のキレがいい。

鉄パイプ持ちを不良AとB、ナイフ持ちがCでボクシング経験者をDする。

「まずは殺傷力の高い奴を……っと」

不良Cが斬りかかってきたのでナイフをかわし、すれ違い様にナイフを持った手を掴む。

その手を上に捻り上げてそいつの体の後ろに回り込み、不良Aの方へ突き飛ばしてやる。

勿論その時にナイフを奪っておくのも忘れない。

その隙に不良Bが殴りかかって来たので、今度はその鉄パイプをかわして相手の懐に潜り込む。

後は相手の鳩尾みぞおちにその勢いで膝をお見舞いしてやり、その時に下がってくる顎にアップパーカット。

まあ良くあるコンボだな。

これで1人は完全ノックアウト。

少し息を整えていると不良Dが素早いフットワークで懐に潜り込んでこようとしてくるので、あえてこちらから距離を詰めてやる。

距離を取ろうとすると思っていたのだろう、一瞬相手が怯むのでその隙にこちらが懐に潜り込み、苦し紛れに放ってくるパンチをかわし、その腕を掴んで背負い投げを食らわせてやった。

ただそれだけでは終わらないので、倒れた相手の頭に蹴りをお見舞いしてやる。これで頭を揺らされて二人目ノックアウトだ。

そこでやっと最初に投げられた不良Cと、ことぶつかって倒れた不良Aが復帰してきた。

……正直ここからは余裕だ。

一番の実力者だった不良Dが余裕で倒せた以上、唯の喧嘩殺法しかできない二人なんて今更相手にもならない。

殴りかかってきた鉄パイプを持ちの顔面をカウンターでぶん殴ってやり、もんどりうって倒れこむと同時にその鉄パイプを奪ってやる。

そして後ろから突進してきた、今は素手の不良Cの腹に野球のボールの如く鉄パイプでフルスイング……突進してきた勢いもあってか『ドグシャアッ』と派手な音を立てて地面に倒れた。

不良Cはそれで気絶したので、何とか起きあがってきた不良Aの顔面に勢いをつけた張り手をお見舞いしてやる。

踏ん張る事もできない不良Aは、3mほど吹っ飛んで気絶した。

「ふう、こんなもんかな」

ちなみにこれは実際にあつた戦闘だ……そんな大したものじゃないから喧嘩かな？

まあ俺がそこそこ強いという事が分かってくれたと思う。

まあ暴力何て振るわないに越したことがないんだが身を守るためには必要な事でもあるだろう。

妹の雫もそこの不良には負けないレベルの実力があるが、それでも何かあつた時俺自身の手であの子を守るように鍛えてきた。

……もし本当にそんな場面が来た時、俺はあの子を守れるだろうか。

「ま、守れる守れないじゃなくて……守るんだがな」

さて、早く家に帰ってシャワーを浴びるとしよう。

俺と朝の日課の鍛練（後書き）

前回言ったばかりなのですが、何やら本気で執筆時間が取れなくな
ってまいりましたので、投稿間隔が開きそうです。すみません。
休日に作ったストックが無くなるまでは今まで通り毎日更新が続く
でしょうが……それも少ないですしねー……多分2話分ほどでしょ
うか……。

響静音説明時に抜けていた一文を加筆。

俺と妹のいつもの(?)朝(前書き)

デデデデーン…デデデデーンアバババガガガガ…オデ、ガ
ンバル!

……ガンバル?イヤ、ガンバレタ……?

俺と妹のいつもの(?)朝

ジャー……

「やっぱり汗をかいた後のシャワーは最高だな」

まあ朝って事もあって、湯冷めに気を付けないといけなけれど。

「……ふう、さっぱりした。今日も一日頑張りますか!」

風呂場からでて、出しておいた制服を着る。

ウチの学校の制服は私立なのでウチオリジナルの制服であり、俺含む生徒の多くが気に入っている物である。

女子と男子の制服には結構な違いがあり、男子の制服のデザインは学長が、女子の制服のデザインは教頭が担当して作ったとか。

男子の制服は格好良い系で、女子の制服は可愛いと結構な人気があり、デザインの方向性にもある程度の違いがある。

男子が黒と白の二色だけで、シャープさや格好よさを考えて作られているのに対し、女子は黒を基本とした赤と白という落ち着いた、しかし可憐さが引き立つようなデザインになっている。

まあこの説明を聞いただけではそんなにおかしい部分はないと思うだろう。

しかし今のデザインに決定する前の……つまりデザインを決める会議をした時には、かなりの論争がまき起ったというのは、この学校では有名な話だったりする。

どういふ事だか知らないが、学長と教頭の作るうとしたデザインが派手すぎて、学校の制服として機能するような代物ではなかったとか。

学長は本来もつとカッコいい物を作りたくて、教頭はもつと派手な物が良かったようで、当時の論争を知る学年主任の話を聞く限りではそれはもう酷い物だったそうだ。

実際にどんなデザインだったのかは知らないが、教頭曰く「二人の作ってきたデザインはそれはもう酷かった。学長のはコスプレにしか見えなかったし、教頭のはアイドルでも着るようなフリフリの付きまかった謎のドレス（？）ってかんじだった。二人も中々譲らないし、正直今のまともなデザインになったのが奇跡だよ」…と言う事らしい。

ちよつと見てみたいかもしれん。

「よし、洗濯終了、次は朝飯の用意だな」

ふつ、実は制服の事を考えている間、洗濯物を洗濯機に入れて起動、洗濯が終わったら大まかの皺をとってからベランダに干す。

という事を通れるような手際で行ってきたのだ。

……やっぱ俺主婦だわ……。

「えーと…昨日は和食セットだから、今日は洋食セットか…」

まずはスクランブルエッグから。

ボウルに卵を割り、そこに塩コショウ、牛乳等をを加える。

それをフライパンに流し込み、そこに一口サイズに千切ったチーズを加える。

雫はこのチーズ入りスクランブルエッグがお気に入りだからだ。

ある程度固まってきたら火を弱め、軽くかき混ぜながらゆっくり焼いていく。

さて、スクランブルエッグが出来たので今度はサラダ作りだ。

といつても手の込んだものではなく、レタスを手で食べやすい大きさに千切り、いくつか作ってある茹で卵を半分に切ってレタスの上に並べる。更にシーチキンを上置いて市販のドレッシングを掛ければそれで終わりだ。実に簡単である。

まあここまで出来れば後は食パンを焼くだけなので、焼く前に雫を起こしてこよう……どうせすぐには起きてこないだろうし。

「全く、どうしてあいつは俺を起こす時以外あんなに寝覚めが悪いんだか……」

昨日のように俺を起こす時は、俺が朝の鍛練をする朝4時なんて時間に起きてきたのになあ……。

それなら普通の時間にも自分で起きれるだろうに……。一度、「何でお前は普段起こしてもらわないといけないのに、俺を起こす時はそんな朝早くに起きられるんだ？」と聞いた時は「兄貴のためならいくらでも頑張れるんだよ！……それに、兄貴の寝顔も見れるし……」と兄としては嬉しい返答が返ってきた（後半は聞こえていない）

まあつまり、俺の為には頑張れるけど自分の事になると面倒くさくなるという事だろう。

あまり良い事ではないが、しばらくこの状態でやっていこうと思う……それに、雫の寝顔は可愛いし。

「そんなこと考えてても仕方ない……起こしに行くか……」

○

はい、それでは可愛い可愛い妹の部屋へやってきました！

……いや、今日は俺の部屋だけどね……。
とりあえず

ガラッ

音が『ガチャッ』ではないのは、俺の部屋の扉が横開きだからだ。
……別にどうでもいいか。

「スウー…スウー……んー（モゾッ）」

「やっぱり爆睡してるな………」

しかも俺が滑り込ませた枕に顔をうずめて、たまに深呼吸しているようだが…、寝相にしては意味が分からん…。

まあとりあえず起こすか

「おーい雫？ 朝飯が出来たから起きろ！」

「………いやあ」

寝言で拒否…だと…？上等ではないか……。

「いいから起きろ！ 学校遅れても知らんぞおい！ 唯でさえ成績が悪いのに、これ以上成績を下げたら留年に繋がりがねんぞ！」

「うあー…うぐう…（モゾモゾッ）」

ん？後一息つばいな。

「早く起きないと置いて行っちゃうぞコラァ！」（ズビシッ）

後頭部にチヨップをかましてやる。
流石にこれで目は覚める筈だ……。

「あいたあ…あに、き？ うう…今のは夢だったのか…？」

「何の事が知らんが、とつとと起きなさい。飯が出来たぞ？」

…。
…。
…。
…。
…。
…。

「ほら、枕を離しなさい。布団片付けるから」

「え？やだあ………」

えー………

「…何故に？」

「だって…その…えっと…うぐう（兄貴の匂いがするから…何て言えねーよ！）」

だから何でそんなに大事そうに抱きしめてるんだよ…何か抱きしめる力強くなっただし…。

「さつさと離せって…じゃあお前の部屋まで抱っこして運んでやるってのはどうだ？」

理由は分からんがこう言えばちゃんと起きてくれるし。（普段は雫が着替えてから一階に運ぶ）

まあこの手を使うのは月に1度使うかどうかって位だな。

今日はすでに俺の部屋（一階）で寝ていたから、一度上の雫の部屋に連れて行かないといけない。

着替えは雫の部屋だからな。当たり前だけど。

「うー…、嘘じゃないよな？」

「ああ、嘘じゃねーよ。……と言つかお前、昨日一緒に寝た事とか、今の抱っこで言う事聞く事とか、そんなに甘えん坊だったっけ？」

いや、甘えん坊なのは昔からだったが……こんなに露骨では無かったと思うんだが……。

「な！？ う、うつせーよ！ 兄貴には関係ねーだろ！？」

「いやいやお前が甘える対象俺だから。どこにも無関係って言える要素ねーから」

「うぐぐぐぐ……兄貴はやっぱり甘えられるのって嫌か……？」

何を言っかと思ったらバカな事を……

「可愛い妹に甘えられるんだ。嫌なことなどあるものか、寧ろ嬉し
いぐらいだよ。……いつまで甘えてくれるのか分からんがな……（
ボソッ）」

「そ、そうか……えへへ、なら良いだろ？ ほら、早く抱っこしてく
れよ！ 嘘じゃねーんだろ？」

「はいはい、お嬢様は甘えん坊ですね」ヒョイッ

………全く、本当にいつまで甘えてくれるんだろうな。

俺と妹のいつもの(?) 朝(後書き)

ガンバ…れない…俺頑張ったよ…。
もう一話分くらいストックがあるぜよ。

俺と妹の通学風景（前書き）

ストック尽きた……

俺と妹の通学風景

「　　　　と、着いたぞ。着替えたらずぐに降りてこいよ？
パン焼いとくからな？」

「分かつての。焦がすんじゃないぞ？」

「ふん、この我を誰だと思っっているのだ雑種？　この程度の事、王たる我が片手でも成して見せよう」

「いやいや…食パン焼くのに王は関係ねーだろ…っっていうか誰でも片手で出来る事じゃねーか…」

「いやー何だかあのキャラ嫌いになれなくてな…」

「あたしはやっぱり騎士王の女の子かなあ…」

「そっぴやお前と同じ金髪だもん…っ、俺の好きな英雄王だつて金髪じゃねえか」

「いや、英雄王はあの上天下唯我独尊を地で行ってるのが良いんじゃないか」

「いや兄貴、上天下唯我独尊つてさ、自分が最も偉いって意味じゃねーぞ？」

え？　マジで？　…いやいやそれは無いだろ…

「そんな訳無いだろ。上天下（ry　って自分が一番偉いって考えを持ってて、傍若無人な行いをする奴の事なんだろ？」

「いや、それは間違ってるんだって！」

「それ誰から聞いたんだ？」

「美咲」

む、美咲ちゃんか…合つて無いとは言切れんな…

「でもそれが合ってるかは分からないんだろ？」

「あたしもそう思ったからパソコンで調べただけど…Wikiでは違うって書いてあったぞ？」

むむ…それは…むう

「そう…なのか…知らなかった………」

「まー他の奴に恥ずかしい所見せる前に分かって良かったんじゃないかねーか？」

「まあ、そう思っておくか…」

「じゃあ疑問も解消したし、あたしは着替えるからな」

「おう、じゃあパン焼くとするかー」

ボタン

背後でドアが閉まる音を聞きながら、俺はリビングへ向かった。

○

「さて、それじゃーいただきます」

「いただきますーす」

ガツガツ アツアツニキソレアタシンダゾ！

イヤコレオレンダカラ！ オレノサラニノツテタカラ！？

というわけで朝食終了。

まあただひたすら食ってただけだしね。

○

「さて、それじゃあ出発しますか」
「今日はちゃんと余裕持つて行けるんだな」
「昨日はお前先に行っちゃったからな……」
「いやいや、あれは兄貴が考え事してたせいで遅れたからだろ？
あたしは悪くねーよ」

ぐっ言い返せない！

「……じゃあ、行ってきまーす……」
「行ってきまーす」

俺たちがいなくなれば、誰も返事をする事は無い。
それでも長年やってきた習慣だから、どうしても呼びかけはしな
いとね。

○

テクテクテク…
テクテクテクテク…
テクテクテクテクテク…

話題が無い…。

流石にこのままずっと無言のままってのは嫌だな……。

「雫よ。可愛い我が妹よ」

「かつかわっ!?!? …ゴホンッんんっ……何だよ」

「話題が無い。お前の方は何かあるか?」

「えー…そうだなー…、別に何かある訳じゃないけどさ、部活の事でも話すか?」

「部活の話し? それってこの前しただろ。結局現状維持ーみたいな感じでさ」

「いやまあそうなんだけどよ…やっぱり部員が3人だけってのは少ないかなーってさ! アハハ……。 (兄貴と美咲を2人きりにするのが嫌だなんて言えないし…やっぱこの言い方だと違和感あるかな…。)」

「まあお前がそう思ったんならいいさ。 そうだな、俺の友人で、今部活に入って無い奴がいるんだけどな? そいつは性格も悪くは無いらしい、そいつを部活に入れるってのはどうだろう」

ちなみに『そいつ』ってのは聡里さといの奴の事だ。

あいつは護身術部があんなにグダグダだって事も知らないから今まで入るとは言ってはこなかったけど、それでも何度か入りたそうな顔をしていた。 たぶん自分の運動神経的に無理だと思ってたんだろう。

「…そいつはあたしの事知ってたんのか?」

「ああ、俺の妹も入ってるって言った時、『君の妹…ああ1年のヤンキーみたいな娘だね? 僕だって知ってるよ。 ある意味有名人だし』って言ってたし、知ってるんじゃないか?」

「あたしの悪名を知って入ってくるのかよ」

「別に大丈夫だろ。 お前の評判は最近良くなってきたし、そもそもあいつは他人から聞いた評価で人を嫌うような奴じゃないしな。」

「そうか…だったら、今日は体験入部って事で来てもらって、それ

から入部するか様子を見るか……」

「それが良いな。大丈夫だとは思うけど」

どうせ聡里の事だ、『へえ、いい部活じゃないか。グダグダ時間を潰すだけなんて僕にとってはいいい部活だよ』みたいな事を言うに違いない……。

「これで兄貴の言う奴が入部したら、やっと『同好会』がとれて、『護身術部』になるわけだな！」

「そうだなー……ってか、今まで『護身術同好会』だったんだな……」

「やっぱりダサイよなー……何かダサイよなー……」

「ま、申請もあるから正確に『部』になるのは明日だろうけど」

「ってかそいつが入部するかも分からないのに、何で兄貴はもう決定みたいに見えるんだ？」

「俺はあいつを信頼してるんだよ」

「ふーん……そうか……（女だったら注意するべきだけど……兄貴は『僕』って言うてたから男だろうし、大丈夫だな）」

「お、話してたら学校に着いたぞ。やっぱり無言より何か話してた方が早く着いた気がするな」

「んー……（でも今まで私と美咲、兄貴の3人でやってきたんだしな……どうなるかなあ……）」

ん？ 栗の奴何か考えてるのか？ まあいいか……。

さて、今日は余裕があるし、HRが始まるまでの時間で聡里に話をするとしますかね。

俺と妹の通学風景（後書き）

明日は更新できないと思われる。たぶん。

俺と聡里と部活勧誘（前書き）

毎日更新終了のお知らせ

今日は悪夢を見た。怖い。

俺と聡里と部活勧誘

「何だつて？ 僕に部活に入れだなんて…本気かい？」

「いやいや、別に入れとまでは言っただけだ。ただお前なら良いかなって思っただけ」

「言っても何も君が入っている部活は護身術部だろう？ 僕の運動神経じゃ出来っこないじゃないか」

教室に着いた俺は早速聡里を部活に勧誘しようと話している。

まあまずは護身術部の実態とかを話すしかないな……。

「その事なんだが…実はな…」

「？」

「実は…護身術部ってのはあくまで部活を作るための言い分しか無くてな？ 本当はただ単に俺と妹、妹の友人が集まってグダグダ喋ったりしてるだけなんだよ……」

「え？ でも君は凄く強いじゃないか。あの实力は部活で培ったものじゃないのかい？」

「そのトレーニングは毎朝4時にやってるんだよ。護身術部にはそもそも道場すら無いからな」

「そう…なのか…。 だったら何で今まで僕を誘ってくれなかったんだい？ 酷いじゃないか。僕と君の仲なのに……」

「あー…、それは悪かった。でも俺の妹が知らない人間を入れたがらなくてな……」

「ふーん…それで、どうして今になって部員を増やす気になったんだい？」

「それは俺にも分からない。少し前に『部員を増やさないと』って聞いた時には、『今のままで良い』って言っただけだ」

「ん？ 君が部長じゃないのかい？ さっき君の言った部員の中では君が2年では二人とも1年だろう？」

「そもそも護身術部を作ったのは俺の妹なんだよ。そもそもって部長も妹なわけ」

「ふむ……（まさか護身術部の実態がそんな物だったとは……と言う事は僕が入部しても何ら問題は無く、放課後も十夜と一緒にいられるという事なのかな？ 確か話を聞いた限りでは十夜の妹は中々のブラコンだって話だし……これは僕が十夜を奪い取るチャンスが来たって事だね？ フッフ……）」

なんだか思っていたよりも考える時間が長いな……。
もっと早めに答えを出すと思ってたんだが……。

「あー……それで、答えはでたか？ 俺は入部して欲しいんだが……」
「っ！……君は僕に入部したいのかい？」

「そりゃそうだろ。お前なら何にも問題無いし、3人だけつてのも少し寂しく感じてきてな？ それで新しく部員を増やすならお前しかいないと思っただよ」

「そ、そうかい……（十夜は僕に入って欲しいんだ……フツ嬉しいなあ……これは絶対に入らないとね。そもそも入らないなんて選択は元々無かつただけどね／＼）」

「で？ 結論は？」

「勿論入部させてもらうよ」

あ、そうだ。もう一人の……え

っと、君の妹さんの友人だつて言う子の事を教えてくれるかい？

妹さんの方は君から結構聞いてるけどさ、そっちの方はあんまり知らないしね」

そう言えば美咲ちゃんの事はあまり話題に出さなかったっけ。

まあ聡里とは何の関係も無かつたしなあ……。

「ああ。その娘の名前は美咲ちゃんって言ってん」ほーからお前ら席につけー。HR始めんぞー」…あー、また昼休みに話すか」

授業の間の時間は教室移動とかで話をする暇があんまり無いし。

「仕方ないね……（美咲…ね、女の子なのか。その娘も十夜に好意を抱いてるんだらうね……）」

「じゃ、また後でな」

「うん。また後で」

こうして俺は聡里と別れた

いやまあ同じクラスだけど。

○

キーンコーンカーンコーン……

「よし、やっと飯の時間だ……」

「さあ十夜、さっきの話の続きをしようじゃないか」

随分来るのが早いな…チャイムもまだ鳴り始めたばかりなのに。そんなに美咲ちゃんの事を知りたいのかね？

俺たちはお互いに向き合うように椅子に座り（聡里は無人になった机と椅子を借りて）弁当を出した。

「あ、また卵焼きいるか？」

「勿論貰うさ。…君の弁当には必ず卵焼きが入っているんだね」

「まあ場所を埋められるしな」。それに、お前にも毎日あげるわけ

だし」

「え？ それってもしかして…僕の為に作ってきてるって事かい！？」

「別にそれだけってわけじゃないさ。ただ、理由の一つではあるってだけだよ」

「フフ…そうか…僕の為に作ってるって部分もあるんだ…」（これは嬉しい事を聞いたなあ…卵焼きもいつもより美味しく感じる…フツツ）」

何か凄い嬉しそうだな…いつも無表情に近い顔がここまで変わるとは……

「聡里ってさ」

「ん？ なんだい？」

「笑顔も可愛いのに、どうしていつも無表情なんだ？ そっちも可愛いと思うけど…笑顔の方が可愛いと思うぞ？」

「っ！？ な、ななな…何を言うんだ！ ぼ、僕は可愛くなんて…

…」

「いやいや十分可愛いだろう常識的に考えて」

「まっまた可愛いって言うて…：…：そ、そうじゃなくて、美咲って娘の話をするんだろう！ 僕の事なんていいから早くその娘の話をしてくれよ！…！」

えー…、まあ聡里自身がそう言うなら仕方ないか…これ以上言っても聞いてくれなさそうだし…。

「分かった分かった。えーっと美咲ちゃんはな？ 俺の後輩で雫の友人…っていうか親友で、荒っぽい言動のせいで浮いてた雫をクラスに溶け込ませてくれた娘なんだよ。」

「雫って言うのは君の妹の名前だったね…最近彼女の悪評を聞か

くなつたのはその娘のおかげって事かい？」

「ああ。ホントに良い娘なんだよ…雫も良い友人を持ったなあ……」

「ふむふむ…それで？ その娘は部活で何をしているんだい？」

「別に何をしてるっていうか、唯喋っているだけだけど…あ、昨日は美咲ちゃんがさ、何故か俺に膝枕してくれて言うからしてあげただけど…眠たかったんだな」。膝枕したらすぐに寝ちゃったんだよ」

あの時の寝顔可愛かったな！

「なん…だって…？」

ん？ 何か聡里が凄い驚いてる…どした？

「何を…何をしてるんだ君は！」

「うお！ いきなりどうした!？」

突然叫ぶなんてお前は雫か！

「もしかして君は、その美咲という娘と付き合っているのかい…？」

「え、いや別に付き合っではないぞ？ というか膝枕は家で雫にしましたし…」

「妹にも…？ もしかして君は僕が言ったら、僕にも膝枕してくれるのかい？」

ブルータス、お前もか。

お前も膝枕か。

俺の太腿で寝る事はそんなに楽しい事なのか…？

「ああ、楽しい。とても楽しいよ。だから僕にも膝枕をしてくれ」

「ナチュラルに心を読むな…、まあ別に膝枕は良いけど…」
「約束だよ？ 嘘だったら…フッフツ」

キヤーツまた背筋がアツー！

…この展開、何か覚えがあるぜ……。

「じゃあこれで話は終わり。弁当を食べよう？ 話しに集中して
てあまり食べれて無いからね」
「ん、そつだな。時間もあまり余裕ないし、食べる方に集中します
か……」

こうして昼休みは過ぎていった。

しかし膝枕はどこでやるんだ？

まさか…部室、じゃないよな……？

俺と聡里と部活勧誘（後書き）

とりあえず一日置きの更新になるかな？

聡里と部員の顔合わせ（前書き）

危なかったぜ…あと少しで親知らずを抜かなければならなかった…。
…。
まあこれ以上伸びてきたらどっち道抜かなきゃ駄目だろうけどな…。
……。

聡里と部員の顔合わせ

「こいつが俺が言ってた、今日から新しく部員になる聡里だ。良い奴だし皆仲よくしてくれよ?」

「初めまして。今十夜が紹介してくれたけど、明石聡里だよ。これからよろしくね?」

今は聡里と話をした時から大分時間が過ぎて、聡里と皆の顔合わせをしている。

はてさて、我らが部長殿はどんな反応を…あれ? 何か俯いて震えてるんだが……。

「おい、兄貴……」

やっと喋ったかと思えば何か声が一段低くなってる!?

これは刺激しない方が良くもしれん……。

「何だ我が妹よ」

「話が違っじゃねーか……」

「え? 何の事だ?」

「聡里って奴は男じゃねーのかよ!」

「いやいや、誰も男だなんて言っただけよ!」

勝手に勘違いして怒るんじゃない!

「でも一人称が“僕”なんだったら普通は男だと思うだろ!」

まあそりゃそうだが……

「俺は一言も“男”だなんて言つて無いんだがな……」

「な！？　ぐぬぬ……（チクショー！　あたしのバカ！　ちゃんと性別を聞いておけばよかつた……いや、でもまだこの女が兄貴を好いてるつて決まつた訳じゃないし……後で理由を付けて聞くしかないか……？）」

今度は黙つて何かを考え出した……忙しい奴だな……。

「あの、十夜先輩？　新入部員つてなんの事でしょうか……？」

え？

「美咲ちゃんは雫の奴から聞いて無いのか？」

「ええ、雫ちゃんからは何も聞いていませんけど……」

おいおい……。

美咲ちゃんも部の一員だつてのに何で言つて無いんだよ……。

まさか忘れてた？　でも今日出た話だし忘れるような物でも無いと思つんだがな……。

「おい雫、何で美咲ちゃんに説明してな……あれ？　雫の奴はどこ行つた？　つて聡里の奴もいないじゃねーか」

一体どうしたんだ二人とも……？

「それで、あんたは兄貴の事どう思つてんだ？」

今、あたしは聡明って奴と一緒に部室がある校舎とは別の校舎にある空き教室にいる。

理由はこいつが兄貴に対してどういふ感情を持ってるか聞き出すためだ。

これだけ部室が離れていたら話を聞かれる可能性もないしな。鍵も掛けたし。

「どう…とは？ 何の事が僕には分からないんだけど。もう一人の子はそもそも僕が新しく入る事すら知らなかったみたいだけど、あれはどういふ事なんだい？」

「うっ、あれは……」

やべえ、美咲があたしのいない時兄貴にくっ付いたりしないように、新しく部員を入れるなんて言えねーしな……。

美咲の奴に『新入部員を入れる』なんて言ったら理由をしつこく聞かれるだろうし、そのための建前を考えてたらいつの間にか放課後だったんだけど…美咲には悪い事して…っていやいや！

あれはあたしがいない隙に、兄貴に膝枕なんてしてもらった美咲が悪いんだ！ 私は悪くない！！

「ねえ考え事の最中で悪いんだけど、結局『どう思ってるんだ』というのはどういふような答えを言えばいいのかな？」

「（そ、そうだとまずそっちが先だった）……じゃあ直球で行くぞ。あんたは兄貴が好きなのか？ それともただの友人でしかないのか？」

「フツ…それを聞いて何の意味があるんだい？ 君がそれを聞く理由なんて無いじゃないか」

「あたしがいない間に、部室で兄貴に変な事をしないか心配してる

からだ！」

「それは美咲って娘が十夜に膝枕してもらった事かい？」

な、何で知って…！？

「フツ、十夜に教えてもらったんだよ。勿論僕も後で彼に膝枕してもらうけどね？」

…：…そうだ、さっきの質問の答えだけどね。大好きだよ、僕は異性として十夜を愛している…：フツ、これで満足かな？」

な、なななな…：…

「ふざけんな！ 何でお前が兄貴に膝枕って言うか何で兄貴を名前で呼び捨てしてるって言うか兄貴はあたしのもんだ！ お前にはやらねーぞー！」

そ、それに…：あ、愛してるだなんてそんな…：／／／

「フツ、ふざけてるだ何ておかしい事を言うね？ まず膝枕の事だが、単に僕がやってもらいたいからさ。愛する男性が他の女に膝枕をしたなんて聞いたら我慢できるわけ無いだろう？ 呼び捨ての件だが、それも簡単な事だよ。僕が彼に『呼び捨てで良いか』と聞いたら彼が『別に構わない』と言ったからさ。」

…最後の事だけど彼は君の物じゃあ無い。今は僕のものでも無いけど、必ず僕のものにして見せるよ？

フツ、兄離れの用意を済ませておくんだよ？」

そうか、分かった。

こいつは本気で兄貴が好きなんだな…：…？

「いいさ、分かったよ！ 今日からあたしとあんたは敵同士だ！
兄貴は絶対渡さねーからな！？」

「勿論さ。……それよりも、美咲って娘と十夜は今二人きりになつてると思っただけど…彼女は十夜をどう思ってるんだい？ 好意は持つてると思っただけど」

「うわー！ 忘れてた！！ 折角美咲が兄貴と二人きりになるのを阻止するために新しく部員を入れることにしたのに、これじゃあ『ほんまつてんとう』って奴じゃねーかあああああ！？」

「ちくしょう、直ぐに部室に戻るぞ！」

「聡里って呼んで良いよ。君は僕の義妹になるんだからね…？ フツ」

「はっ！ 言ってる！ 兄貴は渡さねーからな！！」

とにかく戻らねーと！ 話し始めて10分は経ってるし、部室から離れてるから戻るにも少し時間がかかる！ 昨日みたいに美咲がまた変な事兄貴に要求してそーだ！！

「兄貴はあたしが守って見せる！」

「やれやれ、騒がしいな…（大好きなお兄ちゃんを独占したいだけだろっに）聞いた通りブラコンだな、この娘は（ボソツ）」

「ごちゃごちゃ言ってるで走れ！ 置いてくぞ！？」

聡里の奴足おせーんだよ！

「ちょ！？ 待ってくれよ、君が早いんだ！」

「確かにあたしは早い方だけど、それ以上に聡里が遅いんだよ！」

もういい、置いて行く！ スピードアップだ！！

置いて行かないでー！？

遠くから聡里の叫びが聞こえたような気がしたけど、兄貴を助けるために全力を出したあたしの耳にはその叫びは入ってこなかった。

聡里と部員の顔合わせ（後書き）

ここ最近本当に寒くなってきましたねー。
皆さんも体を冷やさないようお気をつけください。

俺と美咲ちゃんの…ちょっと、ま、やめ!? (前書き)

やっとここまで来たぜ……!

実は今までがプロローグ的な何かだったのさ!

まあ行き当たりばったり&勢い+ノリで妄想を書き殴ってるだけだからね、仕方ないね、ホントにね。

気に入らなければブラウザバックをしてくれい!

それが君の為だからな! たぶん!

俺と美咲ちゃんの…ちょっと、ま、やめ!?

「それで先輩。新入部員って何の事なんですか？ 今いた人がそうなんですか？」

何故か雫と聡里が部室からいなくなっても変わらず、俺は美咲ちゃんから追及を受けていた。

と言っても、普通に考えればただ『そろそろ“同好会”からちゃんとした“部”にする為に、新しく部員を入れるんだ！』的な事を言おうとしてるんだが……。

「ああ、今はないけどさっきの女子…ああ、男子の制服着てるけど立派な女のk「男子じゃないんですか？」いやだから女のk「男子ですよね？」…その、女のk「男の娘ですよね？」…えーっと……」

何故か女の子って言わせてくれないし、そのせいで話が進まないんだよ……。

一体どうしたんだ美咲ちゃんは？

俺に『女の子』って言わせなければ聡里の性別が男に変わる訳でもないし、何より美咲ちゃんの表情的に『女子には見えない』のではなくて、『女子だと信じたくない』って感じなんだよなあ……

もしかして男の友人が欲しかったとか？ 普段雫と一緒にいるから美咲ちゃんに寄って来る男は雫が怖くて近寄らないらしいし、放課後も護身術部（とは名ばかりのグダグダ部）で雫と一緒にだしな…美咲ちゃんとまともに喋っているのは俺ぐらいだからな…… 出会いが欲しかったのか？

でもこの考えが合ってるかなんて分からないし…、素直に聞いて

怖い！

しかも俯いてるせいで表情が見えないし余計に怖い！！これが
ダークサイドって奴か！？

一体どうした！ 本当にどうした！？ これじゃあ説明できねー
じゃん！

雫達はどこに行ったんだよ！？ 本来は雫が説明しておく事だっ
てのに！！

俺一人で一体どうしたら……

「…仕方無いわ。少しずつ先輩に振り向いてもらおうと思ったけど
そうも言ってられないみたいだし……」

お！ 美咲ちゃんがダークサイドから戻ってきた！ これなら説
明できる筈！

「な、なあ美咲ちゃー今なら先輩と2人きりだし、今のうちに既成
事実を作るしかないわね。いえ、今この時間は神様がくれたチャン
スなんだわ。先輩と既成事実を作って夫婦になるチャンス……」
え”？」

ダメだあ！ 戻ってきてないよ！ 完全にあっち側ダークサイドじゃん！？
まずいマズイまずいマズイ……どうすれば……

「ねえ、先輩？ 十夜先輩……？」

「お、お……おおう何だ？」

「私と……イイコトしませんか……？」

何か目に光が無いイイイイイイイイイイイイ！？

ちよっ、怖い、怖いって！ 近づいてくんな！ 近づいて来ない
で！？ 近づいて来ないでください……

「何で逃げるんですか先輩…？ 酷いじゃないですか…私はこんなに先輩を愛しているのに……」

「い、いや。あ、愛って一体何の事だ…？」

本当に分かん。っていうか怖くてちゃんと頭が回らない！ 昔、殺気立った「ヤ」のつく自由業をしている強面のお兄さん達と向き合った時でもこんな事無かったのに……！

「本当に気づいて無かったんですね先輩…。私は、先輩の事が好きなんです。先輩は違うみたいですけどね……」

「いや、俺だって美咲ちゃんの事が好きだぞ…？」

栗の事もあるし、とてもいい娘だし、可愛いし。

「先輩のそれは“友人として”ですよ？ 私は“異性として”先輩の事が好きなんです」

その瞬間、俺の頭は真っ白になった。

さっきまで忙しく回っていた思考もあっさりと止まってしまふ。それと同時に後ずさっていた体がソファにぶつかってしまったよっだ。

俺の体はソファに倒れこんでしまい、更にその上に美咲ちゃんが馬乗りになってきた。

頭が真っ白になって体も動かせない俺の顔に、美咲ちゃんの顔が寄ってきて……

ちゅっ

「んっ…んちゅっっ…」

「んむうつ!?!?...んんっんむうつ」

俺と美咲ちゃんの唇が重なってしまった。

バン!

「兄貴! 無事か!? 美咲に何かされて.....え?」

「ゼエ...ゼエ...し、雲...もう少し待って欲し.....なん...だと...?」

最悪のタイミングで、いなくなった2人が帰ってきてしまったよ
うだ。

え? 良く分からないけど本当にヤバくね?

俺と美咲ちゃんの…ちよっ、ま、やめ!?(後書き)

実はタグにある「ヤンデレ」は「(ヤンキー+デレ)」「つまり零の事だけを指しているのではなく、「病み+デレ」、つまりは本来の意味の「ヤンデレ」の意味もちゃんとあるのだよオ!!

……え? 本来の意味のヤンデレが出てくるのは分かった?
いやいやそんな……マジで?

まあ流石にずっと美咲をダークサイド状態(病みモード)でいさせはしませんけどね?

それだと守ろうとするであろう主人公や、妹である零、新しく護身術部に入ってきた聡里達全員がヤヴァイ事になる未来しか見えませんし。

作者は鬱展開が苦手です。超苦手です。

通らざるおえないシリアスな場面とかは頑張って耐えますけどね…。
タグに「シリアス」なんて入れる気も無いですし、その点は安心してくださいな。

色々言っただけとき、正直今回の話のシーンだけじゃヤンデレとは言えないよねえ……。あ、13時頃に人物設定も投稿します。

人物設定…的な何か（前書き）

キリが良いので連投してみる。

読みにくかったりしたらごめんなさい。

もしかしたら修正入れたりするかもね……。

人物設定…的な何か

・主人公

名前：瀬川十夜^{せがわ とおち}

年齢：17歳（高校2年生）

身長：180cm

体重：67kg

容姿：黒髪黒目の普通の日本人で、短髪を適当に櫛を入れただけの髪型。顔は中の上といった位で、普通にイケメンである。（爆発しろ）

能力：運動神経はそこそこ高く、五段階評価の成績でいえば基本4が取れるくらいの万能型（それぞれのスポーツの競技を得意とする人間には勝てない）

ただし喧嘩はかなり強く、そこらのチンピラはおろか“ヤ”の付く自由業の方たちにも勝てるほど強い

頭の方は、英語と数学は壊滅的だがそれ以外は結構できる方。（こんな物いつたい何に役立つってんだー！）

性格：平等。誰に対しても公平に接する。たとえ周りの人間に虐められていたりしても、それに影響されず自分の視野で相手を見る。

趣味：家事、ゲームやアニメ、インターネット、読書等

軽度のオタク（一般人よりはネタに反応し、重度のオタクのネタには付いて行けない事がある）

好きな食べ物：カレー、オムライス、ハンバーグ、グラタン等の子供っぽいものや、しいたけや春菊等の微妙な位置の物まで。

嫌いな食べ物：トマト（生）
トマトだけは本気で食べられない。そのくせ加工された物は食えるという救えない人。自分がトマトを食べられない為、瀬川家ではサラダなどでトマトが出る事は決して無い。

備考：妹や気に入った相手を大事にする。（よくある身内には甘いな）妹に手を出す奴はデストロイ。（普通の男子は十夜がデストロイする以前に寧にデストロイされる）

容姿がそこそこ良く、性格も良いため結構モテるが他人の好意には疎いというエロゲーの主人公みたいなやつ。（爆発しろ）

ただし、人気なのは女子からであって、男子からは敬遠されている。（寧に寄ってきた30人も男子を兄妹で撃退した為）
毎日の日課として、ランニング等のトレーニングを行っている。

実は面と向かって告白してきたのは神楽美咲（後述）が初めてだったりする。

その為十夜は初めての告白で頭が真っ白になってしまった。その隙を狙われて許してしまったキスは十夜のファーストキスだったりする。

一日で美少女の手で2つも初めてを体験したね！（爆発しろ）

一人称は“俺”

・主人公妹
ヒロイン

名前：瀬川 雫せがわ しずく

年齢：15歳（高校1年生）

身長：168cm

体重：（血で隠れて見え無い）

容姿：金髪碧眼で美少女。黙っていればほとんどの人間が見惚れるほどの釣り目美少女である。

髪型はポニーテール。巨乳（D）
言動で損をしているが……

能力：運動神経は高く、それぞれのスポーツの競技を得意とする人間に食らいついて行けるレベル。

喧嘩は兄の十夜には大分劣るが、そこらのチンピラを瞬殺できる程度には強い。

頭は…その…何だ、察しろ。（一言で言うなら“残念”）

性格：性格自体は平等で、本来は誰とも公平に接するが言動が荒っぽく、必要以上に干渉してくる相手には暴力を振るったりする。

趣味：兄を観察する事、ぬいぐるみ集め（最近は今ある物で満足しているようだ）、マンガやゲーム等

好きな食べ物：カレー、オムライス、ハンバーグ、グラタン等の子供っぽいもの（というか兄貴の作った物なら何でも好きだ！）

嫌いな食べ物：兄と同じくトマト

備考：ブラコン（末期レベル）、兄である十夜の事が大好き。（あにきい〜）

普段は荒っぽい言動であるが、本当は素直で幼い性格だったりする。それを見せるのは基本的に兄の十夜限定だが。

彼女の容姿に釣られてしつこく話しかけてきたり、終いには体に触れてきた男子を同級生が見ている前で一撃で気絶させたため、クラスでは一時期浮いてしまっていた。

現在では友人である神楽美咲（後述）のおかげで少しずつ溶け込んでいるようだ。（それでも彼女に手を出そうとする人間はいないが）神楽美咲に目の前で十夜のファーストキスを奪われた彼女の心境は……？

護身術部を創設。

ただし彼女にやる気は無く、創設理由が「学校でも兄貴と一緒にいられる場所が欲しいから」だったりするため、部活として一切機能していない。

“護身術部”という部の名前もただ単にそれっぽい名前で作るためでしかなかったりする。

実質の所、「護身術部」と言うよりは「だらけ部」である。

一人称は“あたし”

十夜の友人

名前：明石聡里

あかしさとり

年齢：16歳（高校2年生）

身長：152cm

体重：（メメタアツ！）

容姿：茶髪のロングを背中におろしている僕っ娘。

主人公はボーイッシュなどと言ったが普通に美少女である。普通乳（C）

能力：運動神経は平均よりかなり低め。

喧嘩なんぞした事が無い。（まあ暴力なんて普通、そう簡単に振るうものではないが）

そのかわりと言っては何だが頭がかなり良く、数学と英語が全くできない十夜に教えてあげていたりする。（これがあるため十夜は赤点を回避できている）

性格：冷静

何事も一歩引いた感覚で接する。

趣味：音楽、映画観賞、読書、十夜を観察する事等

好きな食べ物：何でも美味しく食べられる（特に十夜の作った物なら……フフツ）

嫌いな食べ物：無し

備考：何事も一歩引いた感覚で接するため、これといった友人がいない。しかし十夜だけは別で、友人というか寧ろ恋人になりたい。とりあえず鈍感な十夜に自分を女と意識させたいが、恋愛では完全に奥手なので上手く行っていない。

拳句の果てに目の前で十夜の唇を奪われる始末。

最近十夜のいる護身術部の存在を知り（十夜は彼女に自分が入っている事を教えただけで誘う事をしなかった）話を聞いた当初は入部も考えたが、自分は運動神経が切れているため無理だろうという結論に達し、入部を諦めた。

しかし護身術部の実態を知り、更には十夜が入って欲しいと言ったため自分も入る事に決めた。

本人曰く、「十夜がどうしても言うから入るのさ。別に僕は付き合っただけだよ」とのこと。……まあ本当は十夜と放課後も一緒にいられるようになって凄く嬉しかったりするけど。

女子でありながら男子の制服を着ており、その理由は「スカートは面倒くさい」という単純な物であり、実は他に深い事情があったりする……なんて事も無い。

初登場した話では、「十夜が私（聡里）について考えている事なら分かる」と言うような事を言ったが、それは彼女自身にある程度の

観察眼があり、更に普段から観察している十夜本人が感情が表に出やすい人間であることも重なっているだけで、別にそういう能力がある訳では無い。

一人称は“僕”

雫の友人

名前：神楽美咲かぐらみさき

年齢：16歳（高校1年生）

身長：162cm

体重：（アツ！）

容姿：肩まで伸ばした綺麗な黒髪で和服が似合う大和撫子な美人さん。口元に黒子がある。

目つきは若干のたれ目で、某魔法先生に出てくるサムライマスターの娘さんに大人っぽい雰囲気を感じたような感じと言うと想像しやすいか？（髪は短めだけど）爆乳さん（E）

能力：運動神経は一般女子よりは上。

喧嘩？した事あるわけが無いだろうGA！

5教科のうち数学と理科、英語は得意だが、国語や社会はできないという完全な理系（？）さん。（これ以外の3つは完璧なんだけどね……）

性格：平等（？） 社交的
実は腹黒いという噂も。
しかもヤンデレっぽい……

趣味：三味線だとか琴だとか和っぽい物

好きな食べ物：和食

嫌いな食べ物：辛い物（カレーは甘い物なら食べられる）

備考：人当たりが良く、クラスから浮いていた雫を受け入れさせたことから良く分かる。

実は雫に近づいたのは雫の兄である十夜が好きだからだったか、雫が決して悪い人間ではない事が分かり、ちゃんとした友人になった。知り合いは多いが本当の友人がいない彼女にできた初めての友達だったりする。

……何か百合っぽい事を考えてたりしますが、決してそのような事実はございません。

十夜のファーストキスを奪っちゃった人である。

一人称は“私”わたし

知り合いのお姉さん

名前：響静音ひびきしずね

年齢：（ちよつやめ！？）

身長：173cm

体重：（ドグシャアッ）

容姿：黒髪黒眼。背中まで下ろしたサラサラの黒髪や、おっとりとした雰囲気のが特徴的なお姉さん。

魔乳（F：ダト：？）

能力：毎朝のランニングで十夜の速度に最後まで付いていける事や、その速度を維持しながら十夜と話し続けても息切れしない事から、かなりの体力を持つ事が分かる。

性格：包容力満載のお姉さん気質？

趣味：不明

好きな食べ物：不明

嫌いな食べ物：不明

備考：十夜が行っている毎朝のランニング時にいつも鉢合わせする、恐らく近所のお姉さん。

“近所の”の前に“恐らく”が付いたり、性格の部分に？が付いたり趣味や食べ物の所が“不明”になっているのは十夜自身が早朝ランニング以外の時に会ったことが無いから。

限られた時間にしか会ってはいないのだが、静音は十夜に対してか

なりの好意を抱いているようだ。

何やら嗅覚も強いようで、十夜に付いた（付いている）雫の匂いも嗅ぎ取ってしまうほどである。

しかも発言的に本性を隠しているようで、中身はおっとりとしたお姉さんでは無く典型的ヤンデレ人格が本性のようだ。

……誰かに似ている……？

一人称は“わたし”（私と漢字は使わない）

瀬川兄妹の両親

父

名前：瀬川朝一せがわあさかず

母

名前：アリシア・瀬川

備考：瀬川十夜、雫の両親。

現在は海外へ朝一が単身赴任し、それにアリシアが付いて行ったため二人とも日本にはいない。

朝一は完全な日本人だが、アリシアはアメリカ人と日本人のハーフである。

アリシアはアメリカ人の血が濃いのか綺麗な金髪と碧眼であり、そ

の美しさは娘の雫にも遺伝している。
年齢的にはそこそこ行っている筈なのだが、外見は20代でも通じ
るほどである。

朝一の仕事は不明であり、自分の息子と娘には話していない。
別に危険な仕事ではないので心配は無用らしい。

アリシアは専業主婦。

一応英語は話せるが、生まれも育ちも日本であるため得意ではない
とか。

ここまで適当に設定を考えたが、朝一とアリシアを本編で登場させ
る気はあったり無かったりあったり無かったり無かったり無かった
りする無かったりする。

……無かったりする。

人物設定…的な何か（後書き）

とりあえずこんな感じで。

まだ載せていない設定もあるけど、それは本編で出るんじゃないだろうか。

出した時はどうしようかなあ……この設定集に書き足すか、それとも設定集2的な感じで新しく投稿するか…悩むな……。

俺と妹と聡里と美咲ちゃんの修羅場(?) (前書き)

迷彩です…執筆中、何故かデータが飛びました。それはこの話がほとんど書き終わる直前の事だったとです。

迷彩です…最近話の展開がうまく浮かばないとです。

迷彩です…正直言ってもう少し感想が欲しいとです。(願望)

迷彩です…迷彩です…迷彩です……。

俺と妹と聡里と美咲ちゃんの修羅場(?)

「んにゃあ…兄貴い……」

「はあ…明日はどうしたもんか……」

現在俺は妹に抱きしめられています。

あの後俺と雫は家に帰ってきたんだが……。

色々あってまた雫と一緒に寝る羽目になったぜ。

とりあえずあの後どうなったのか回想に入るとしよう。

「おい美咲…？ テメエ何してやがんだ……？」

「僕の十夜に一体何をしてるんだい……？」

「あら、二人とも分からないのかしら？ キスに決まってるじゃない
い」

ヤバい、普段ムスツとしてる雫の表情が完全な無表情になってる。
しかも口調もいつも以上に荒くなってると、ヤンキーモードに移
行したっぽいな。

……普段俺には見せないのに、俺の目の前でああなるって事はそ
れだけ怒ってるって事か……。

聡里も無表情ではあるけど、思いつきり額に青筋ういてるし。
というか聡里。お前はどさくさに紛れて何を言ってるんだ……。

美咲ちゃんもそんなあからさまに挑発するのは止した方が……。
口調もさながらそんな胡散臭い笑顔でいったらそれこそ火に油を
注いでるようなものだろうに。

まだ完全にはヤンキーモードに移行してる訳でもないみたいだし、
ちゃんと謝ったらまだ間に合うレベルの筈だぞ……？

「んな事聞いてんじゃねえよ！ テメエがなんで兄貴にキスしてん
だつて聞いてんだろうが！ あア！？」

「（ビクッ）そ、そうだよ、何を勝手にキスなんてしてるんだい？
まさか勢いだなんて言うんじゃないだろうね……？」

「あ…あ、あらあら。別にキス程度構わないでしょ？ 減る物でも
ないんだし」

ほら、雫が完全にヤンキーモードに移行しちゃったじゃないか。
聡里は…ちよつと雫にビビってたけどすぐ持ち直したみたいだな
美咲ちゃんは手が震えてるけど。

「おい兄貴！」

え？ 俺？ このタイミングでか…？

「兄貴はキスつて初めてだよなア！？（つてかあたしの知らない所
でキスとかしてたら……ユルサナイ）」

「え？ ああ、確かにキスなんて初めてだけど……っ！？」

そつだ、俺ファーストキスじゃん。

減るもんじゃねーよ無くなるもんだよ……。

「気が合いますね先輩！ あたしもファーストキスだったんですよ？」

「「テメー（君は）は黙ってる」「はいい……」

うわあ、俺ファーストキス奪われちゃったんだ…… 八八八ッ。

もうお嬢に行けない……。orz

心から好きになった人の為に取っておこうって決めたのに……。
女々しいだ？ そんな事はしらん！

俺が決めた事を他人にどうこう言われる筋合いは無い！！

ま、その「決めた事」ももう無意味ですけどねー…… 八八八八ッ

……はあ……orz

とりあえずもう過ぎた事だ。今は現状を把握する事に努めよう……。

「おい美咲イ……お前覚悟出来てんだろうなア？」

「十夜のファーストキスを奪うなんて許せないなあ……これはお仕置
きが必要だね……？」

「あらあら、あなた達何をする気かしら……？（ダラダラ）」

こりゃいかん。

雫と聡里の怒りが天元突破してる。

というか何で二人がそんなに怒ってるんだ？

一番怒って……いや、怒ってはいないな。

一番悲しいのはファーストキスを奪われた俺なんだが……。

美咲ちゃんも流石にヤバい状況だった事に気付いたようで、冷や汗をダラダラながしていて全くと言っていいほど冷静さを装えてい

ない。

っつーか二人とも何をやる気だ……？

「流石に兄貴のファーストキスを奪った責任は重いぜエ……？ 残念ながらあたしは平和主義者じゃねーからなア……。時には暴力を振るう事もあるよなア………？」

「フフツ、僕は普段暴力を振るう事なんて無いんだけどね？ 流石に今回は許せないなあ……。 (スツ)」

「あ、あらあら………？ (こ、これは流石に……逃げた方がいいかしら………?)」

暴力ですか。そうですか……。

って流石に暴力は不味くない!?

「お、おい二人とも。流石に暴力h」「兄貴は(十夜は)黙ってる! (黙ってて!)」「はい………」

ダメだ。無理だ。怖い。止められるわけが無い。にゃんこ撫でたい犬でも良い(現実逃避)

「(流石に分が悪い……)三十六計逃げるに如かず! (ダツ)」

「待てやごらア! あたしから逃げられると思ってんかア!? (ダツ)」

「許さない。絶対に許さない。許さないゆるさないユルサナイ…… (ダツ)」

はあ……今日の晩飯はなににしようかな……。

○

……おや？ いつの間にか結構時間が経っていたようだ。

時計を見ると、部活が始まったのが（活動と言えるような事はしていないが今更な事である）四時半頃で、そこから15分くらい経ってからの修羅場（？）が始まって……。

そこからあまり記憶が鮮明じゃないけど……とりあえず今のじかんは5時半。

修羅場の空気は途中から無くなっていた気がするから（三人が部屋から消えた為）、かなり長い間俺はあっちの世界に行ってたんだな……。

というか三人ともいないって事はもう帰ったのか？ いやでも……

ガチャッ

「あれ、兄貴？ まだここにいたのか」

ん？ 雫？

「お前帰ったんじゃないの？」

「美咲を追いかけて行ったんだけどな。あいつ途中でタクシーに乗りやがって……」

なるほど。流石に車には勝てないから荷物を取りに戻ってきたの

か。

でもどんだけ追いかけてたんだよ……。

「しばらくの間はタクシーを追いかけてただけどなあ……気づいたらあんまり知らない所に出てたから帰ってくるのに苦労したぜ」
「そ、そうか……」

ま、まあ車のストレスもかなり解消されたみたいだしいいのか……？
ヤンキーモードになって無いつて事はそういう事なんだろうし。

あ、そういえば……

「聡里はどうした？ 一緒にいなくなっただんじゃ……」

「あいつはすぐバテやがったからな……途中であいつの家にあたしが運んでやったんだよ。その間に美咲がタクシー呼んだみたいでなあ……あいつのせいで……」(ブツブツ)

え？ 一回完全に見失った状態からタクシーに乗った美咲ちゃんを見つけて、そこから暫く追いかけたのか？ しかも車相手に？ ……なにそれこわい。超怖い。まあ俺も多分できるけど。

「それで今帰ってきたのか」

「しかも聡里の荷物も届けてやらないと駄目だなあ。これからダッシュであいつの家まで行って来るから兄貴は先に家に帰っててくれよ。買い物もあるんだろ？」

「あ、ああ。分かった。……寄り道するなよ？」

「しねーよ！……兄貴。今日は覚悟しろよ？」

え？

「（分かってねーな…）兄貴の唇、あたしももらっちゃうかな？」
「ちよっ何言って」「じゃああたしは荷物届けてくるから！」あ、お
い……！」

これは…まだ助かってはいないようだ……ハア……。

〈次回に続く〉

俺と妹と聡里と美咲ちゃんの修羅場(?) (後書き)

辛いべさ。色んな意味で。

感想も欲しいけどPSSも欲しいな。

俺と妹と…ちよつま、やめっ！ (前書き)

える知ってるか、死神は林檎しか食べない。

俺と妹と…ちよつま、やめっ！

（前回のあらすじ）

- ・何故か発動する修羅場
- ・雫頑張りすぎじゃね？（聡里エ…）
- ・危機は去った…ってない…だと…？

「さて…晚饭つくるかあ…」

あれから俺は買い物を買って済ませてから帰宅した。

今日の晚饭は豚キムチにする為、この前使い切ってしまったキムチを買ってきた。

逆を言えばキムチしか買って無いんだけどな…。

ちなみに洗濯物も取り込んである。

食事が終わったら畳むつもりだ。

時間もそこまで余裕がある訳ではないので、さっさと料理を始める事にしよう。

…その前に風呂の掃除と服を着替えないと駄目だけど。

○

「しっかし何で雫も聡里もあんなに怒ってたんだろっちなあ……」

料理をしながら事は、やはり部活（と言つ名の「y」）で合った事だ。

しっかしあそこまで怖い思いをしたのは久しぶりな気がする。

あの二人があそこまで怒るのは中々無い事……っていつか雫はともかく聡里が本気で怒ってる所を見るのは初めてだったように思う。本当に何であんなに怒ってたんだろっ……。

まあ雫はすぐ帰ってくるし、聡里にも明日学校で聞けばいいか。今は料理を完成させよう。

「キムチを投入……っと。後は暫く火を通せば完成だなー」

ガチャッ

「ただいまー」

どうやら雫が返ってきたようだ。

「雫ー？ もう晩飯できるから早く着替えてきてくれー」

目を向けずにそう言うしておく。

料理から目を離す訳にはいかんからな。

まあ別に豚キムチなら大丈夫だけど、これがいつもの流れだから

な。

雫もこう言えば返事をしてすぐ着替えに行くし、その後で皿の用意とかをお願いする。

そして料理を盛り付けたら、二人で『いただきます』をして食べる…と。

まさに日常！ 圧倒的平和な日常風景…！ 素晴らしいね…！

「……………」

ん？ 雫の返事が無い？

「おい雫？ どうし…『ガバツ』うお!？」

一端手を止めて（後は混ぜながら火を通して行くだけ）体ごと振り返った途端雫に抱きしめられた!？

「ねえあにきい…!」

「お、おい、どうしたんだ?」

「というか近い! 顔近いよ!？ 鼻が付きそうだった!!」

「キス…しよ…?」

＼(^o^) /オワタ

「じゃねえ! まだこの危機から逃れられないとは決まった訳じゃない!」

「狐父やその友人の兎も言ったじゃないか! 「決して諦めるな。自分の感覚を信じる!」って!!」

「更に有名なあのバスケットも言っただろ! 「諦めたらそこ

で試合終了だよ」「ってさあ！！

とりあえず火を止めよう。完全に話す体勢にせねばならん。家事とかシヤレにならないからな！

「ま、まあ落ち着くんだ雫よ。とりあえずこの腕をはなさ「やだ！」え、？」

「離れたら兄貴は逃げるんだろ？　そうやって時間稼いで有耶無耶にするんだ……」

「いやいやそんな事は無「そんな事ある！」いい……？」

「今まではそうだったじゃねーか！　でも、今回は逃がさねーぞ兄貴イ……」

これはヤバい。ヤバいつたらヤヴァイ。

「わ、分かった。とりあえずお前は何がしたいんだ？　教えてくれ」

「何がしたいだって？　今言っただばかりじゃねーか。……キスだ

よ。あたしは兄貴とキスがしたいんだ」

「いやいや！　それは駄目「美咲とはしたのに？」あ、あれは美咲ちゃんが無理やり……！」

「じゃあ、あたしも無理やりならいいんだな？」

瞬間、

俺の体は宙を舞った。

ボスンッ

一瞬の嫌な浮遊感の後、俺の体はソファーにソファーに落ちたよ
うだ。

……台所からここ（ソファー）まで投げたのか！？ 俺は結構身
長もあるし体重もそこそこあるんだぞ！？

……ってそんな事はどうでもいい！ この流れはマズ
！？

んちゅっ！

「んむう！？」

「んっ…んん〜」

キス…されてしまった…妹に…キス……。

「んああ…おにいちゃんっ……ぢゅちゅっ！」

「んっう！？ ……ちよっま、やめっ！ ……んむっ！？」

マズイ！ 雫の奴キスはキスでもディープなキスをしてきやがっ
たあ！？

しかもかなり強くホールドされていて抜け出せない！

俺を投げた時といい今のホールドといい、こんなに力が強かった
のか！？

拙い、マズイまずい！ 焦ってちゃんと考えが纏まらないっ。

どうやって脱出すれば……！

「はア……おにいちゃん……愛してるう……」ギュー
「うゴくぐくぐく……」ジタバタジタバタ

今度は顔が胸に埋まって呼吸がガガガガガガ……

「おにいちゃん……。暫くの間キスは続けるからね？ ……変に抵抗したら最後まで行っちゃうかもよ……？」

今度こそ＼（＾o＾）ノオワタ

そうして俺は暫くの間……体感では1時間くらい、実時間では10分ほどの間キスをされ続けた……。

○

「……ちゅっ。はぁ……やっぱり兄貴の唇はおいしかったぜえ……。
兄貴、ごちそうさま」

ああ……やっと終わった……。

父さん母さん、息子は完全に穢されてしまいました……。
妹とこんなにキスをするだなんて……。

「言っとくけどな、これからはあたしも兄貴を“兄”としてではなくて“異性”として接するからな？ 覚悟してくれよ……？」

「おまつ！？ 自分が何言ってるか分かってんのか！？」

「分かってるよ。でもさ、好きだからキスしたんだぜ？ ……それだけ本気なんだ。どれだけ言ったって聞かぬーからな……？」

そうか…もつ、とめられそうにない…か……。

「お前がそこまでいうな」「あ、これからは毎日兄貴と一緒に寝るからな？」ってなんでだよ！」

「あたしは兄貴が大好きだからなア…えへっえへへっ」

うわあ、ヤベエ…。昨日一緒に寝た時既にヤバかったのに、それがこれから毎日だと……？

流石にそんな事が続けば俺の理性がヤヴァイ。何としても阻止せねばならん！

「おい！ 流石に毎日は無理だ！ せめて何日か置きにしろ…！」

「いいぜ」

え？

「別に毎日じゃなくてもいいぜ？ ……何日か置きにでも、一緒に寝るのは良いんだろ？ だったらあたしはそれで良いからなア……」

「あ………」

は、ハメられたああアアアアアアアアアア！？

おのれえ雫う！ 本来の目的より少し高めの要求を提示して相手に妥協させ、自分の要求に限りなく近い選択をさせるとは……！

そんな交渉術を頭の残念なお前がどうして……っ！？

美咲ちゃんだア！？ 絶対美咲ちゃんだ！ あの娘そういうの強そうだもん！ もしかして普段からされてたとかそんな感じか！？

ちくせつ……………。

「えへへ…改めてよろしくな？ 兄貴」

色々無念である。本気で無念である。

……………というかあの交渉術は結構有名じゃん。
なんで俺引つかかったし……………。orz

俺と妹と…ちよつま、やめっ！ (後書き)

える知ってるか、死神は職業らしいぞ。

「死神代行」っていう職業も存在するらしいからな。

次回でやっと回想に入る前に追いつくつぽい。

まさか回想に2話も使うとは……。

作者が昔家族で飼っていた犬の名前が「える」だったりする。()
“エル”か“L”だったかも知れないけど分からん)
シベリアンハスキー…可愛かったなア……。orz

俺の妹がこんなに甘えん坊なわけがない(前書き)

自分で書いておいて思った。

あれ？ privilegされすぎじゃね？ ……と。

もうちょっと他のキャラにも活躍の場(?)をあげないとな……。

俺の妹がこんなに甘えん坊なわけがない

「じゃ、あたしはこれから今まで以上に兄貴に甘えて過ごすからな？」

「今まで以上に甘えて過ごすって……、お前まさか掃除とかの家事を全部俺にやらせる気じゃ……」

やっと役割分担が出来るようになったのに……流石にキツインだが？ 特に精神的にさ。

「そーゆー事じゃねーよ。家事とかはあたしも頑張るぜ？ ただ、兄貴に抱きついたりとかを今まで以上にするって事だよ。……えへへ、いっぱいあまえるからなあ？ 兄貴い……」

Oh, Jesus ! ハイパーにジーザス！ 何てノ（＾o＾）
ノコツタイ

「ダメだって言うのh「却下だ。ド却下だ！」ですよー……」

ダメだ、俺の妹の決心（？）は固いようだ…。

これは暫く好きにさせるしかないか……。

「分かったよ、降参だ。好きにしてくれ……」

「よっしゃー！ じゃあ好きにするぜー！！（ガバツ）」

「うお！？ 急に飛び付いてくるな！」

また押し倒されてしまった……。昨日今日で何回目だよ……。

「んにゃあ…兄貴い……」

当の本人である雫は、俺の抗議を無視して胸に頬ずりしてるし…
ハア……。

とまあ、ここで回想前に戻る訳だな。

○

「おい雫。いい加減に離れてくれ。そもそも晩飯作ってる最中だったんだぞ？」

抱きついていて雫の頭を撫でてやりながら言うてる。

既に雫が帰って来てから30分は経ってるからな…。

流石にこれ以上遅れるのはよろしくない。俺の空腹的に。

「離れるのはいやだ。あたしが帰ってきた時に『もうすぐできるからー』って言うてただろ？ そんなに動き回る必要がないんだったら、別にあたしが背中にくっ付いてても料理は完成するんじゃないのか？」

「ま、まあそれはそうだが……」

おのれ…こやつ覚えていたのか……。

「分かったよ、…でもお前はとりあえず服を着替える。まだ制服のままじゃねーか」

「……じゃあ着替えてくるけどさ、その間に完成だなんて事にはならねーだろーな？」

「ならねーよ。冷めちまったからもう一回火を通さねえと駄目だからなあ」

「じゃあ一瞬で着替えてくる！」

「はいはい、行ってらっしゃい……」

ダダダダダダダ……

「つたく、仕方のねえ奴だなあ……」

○

『いただきます』

さて、あれからまた10分ほどで晩飯は完成したので、今は食べる所だ。

本当に一瞬で着替えてきた雫は、豚キムチが完成するまで俺の背中はずっとくつついたままだった。

完成してからテーブルの上を拭いたり食器の用意とかをさせる時にやっと離れてくれた。

本人は中々離れたがらなかったけどな……。

「んー！ やっぱ兄貴の料理はうめーな！」

「一回冷めたけどな……誰かさんのせいで……」

「ふんっあたしは後悔してねーからな！ ああでもないないと兄貴は

キスさせてくれなかっただろうし」

「当たり前だろうが！ 普通妹とキスするのを容認する兄はいねえよー！」

ハア… そうだよなあ… 俺、妹とキスしちまったんだよなあ……。どうすればいいんだ……。っていうか俺妹に告白されたじゃん…。

「ってか隼よ。お前本気で俺の事好きなのか？ 兄妹としてじゃなく」

「…ああ。あたしは兄貴が兄妹としてじゃなくて異性として好きだ。寧ろ愛してる」

またそこらの男より男らしい言い方をするなあ……。

………というか

「俺って美咲ちゃんにも告白されたんだよなあ……」

そのあとファーストキスも奪われたし。

「…美咲、許すまじ」

「ちよっおま、やっぱりまだ怒ってたのか!？」

キヤー！ 空気がまた重くなって……！

「…まあでも、あいつのおかげで兄貴に対する気持ちに気がついたんだけどな。今までは兄妹としての好きか、異性としての好きか分からなかったんだし」

お？ 空気復活？

「……兄貴のファーストキスを奪ったのは許さねーけどな……！」

「そんな事無かったぜ……」。

「兄貴のファーストキス欲しかった……！」

「お前は何を言ってるんだ」

こんな感じで（栗ボケ、俺突っ込み）食事は進んで行ったとさ。

○

「兄貴〜風呂沸いたぜ〜」

「ん？ そうか。今日はどっちが先に入るんだ？」

「いやいや、何言ってるんだよ兄貴……」

え？ 何その『こいつ忘れたのか、仕方ねーな』みたいな目は？

「今日はあたしと一緒にいるんだろ？」

「なんでやねん！！（スパーンツ）」

阿呆な事をぬかす馬鹿な妹の頭に突っ込みを敢行する。

「いてっ…何すんだよ!？」

「お前が訳のわからん事を言うからだろうが!」

そつだ、これは許される事だ！

「これからは今まで以上に甘えるって言ったじゃねーか!？」

「いやいやいやいや！ 限度があるから！ 一緒に寝る事でもう限界だから!！」

「くっそ……、こつなつたら、無理やりにも風呂場に連れ込んで………」

おいイ、何言っちゃってんですかア？

「そんな事を言う奴とは一緒に寝てやれん」分かった！ 風呂は我慢する！ 我慢するからあ!！」……… よろしい、じゃあとつと入ってきなさい」

今日初めて会話の主導権を握った気がする……。

「え、兄貴が先にはいらんのか？ 昨日はあたしが先に入ったじゃないか」

「俺が入っている所に乱入する気満々じゃねえかお前………」

「ちっ…分かったよ。先に入るよ………」

なんとという露骨な舌打ち……。

なんと諦めの悪い奴だ……。

「じゃあ入ってくる……」（トボトボ）

何か妙に気落ちしてるけど……

「どうせ今日は一緒に寝るんだからそんなに悲しむことねえだろうが………」

「っ！　すぐ入ってくる！」
「バーカ、ちゃんと温まってこい！」

反応的に忘れてたのか？　おつちよこちよいだなおい。
しかも思い出した途端に元気になるとは…現金な奴だなあ……。

「ったく…本当に可愛い奴だよ。俺の妹は……。」

「そうして、今日も一日が終わ…る？　いやいや、もうちよっとだけ続くんじゃよ。」

俺の妹がこんなに甘えん坊なわけがない（後書き）

お腹が痛いです。死ぬほど痛いです。

…え？ お前の体調なんか興味無い？ それはごもつとも。

だったらこう想像すればいいのだ。

背伸びして大きめの物を買った結果、結局ダボダボなジャージを着た癖毛で身長130cmの幼女が、「ぽんぽんいたい…」と涙目で言っている光景を…想像すればいいんだ……。

俺キモイわぁ……orz

兄貴とあたしの二度目の夜（前書き）

あばばばば……。

クオリティがやばい。まさかスランプ？ そんなバナナ……。

ハイパー難産で更にグダグダになったから気を付けてエ！

兄貴とあたしの二度目の夜

「あゝ、しんどかった……」

雫が風呂に入って、やっと一息つく事が出来た。
全く、今日は散々な一日だったなあ……。

初めての告白と同時にファーストキスを奪われて、それだけでも思考停止に陥ったのに妹にも告白されるとか…、本当に色々あった一日だった……。

「あ、そういえば……」

聡里の奴はどうなんだろう。

そう言えばあいつも修羅場(?)に突入した時「僕の十夜に何してるんだい……?」って言ってたような気がする……。よく覚えてたな俺……。

もしかしてあいつも俺の事を? いやいやそんな……、あー、でも否定もできないような気がするなあ……。

あー! 駄目だ! 頭が働かない! ……やっぱり今日はさっさと寝て、明日直接本人に聞くしかないか……。どうせ考えて分かる物でも無いしな。

あーでも今は雫が入ってるんだっただか。

だったら今のうちにやる事全部終わらせて、風呂からあがったらさっさと寝れるようにするか。

……本当に今日は疲れた。

○

「ふう。これで終わり……っ」と

元々そんなに溜まってたわけでも無いし、結構すぐ終わったな。
ま、そもそも2人分の家事だし、いつもどおりにすればこんなも
んか。

そう言えばそろそろ雫も風呂からあがる頃かな……？

「兄貴ー、風呂空いたぜー」

お、丁度空いたか。仕事が終わったと同時にナイスタイミング。
それじゃあ俺も風呂に入るか。
とりあえず振り向いて返事を……

「ああ、分かったじゃあ入r……って何って格好してやがる!？」

おおおお落ち着け、ただ妹がバスタオル一枚だけの格好で出てき
ただけだ……って落ち着けるかぁ!!

「いいじゃねーか別に……うれしいだろ？」

「嬉しくない! 早く服を着ろお!!」

「(顔真っ赤にして……兄貴可愛い……)分かったよ、着れば良い

「んだろー」スタスタ

「行った……か……？」

「はあ、疲れる……」

もうさっさと風呂入って寝よう……。

○

「ふいーさっぱりしたあ……」

「よし寝よう、さっさと寝よう。」

「布団敷くの面倒くさ……って敷いてあるし……」

「何で布団が敷いてあるんだ？ 俺はちゃんとしまった筈だが……
まあいいか、とにかくさっさと寝よう。」

「よっころしよっとそういえばそろそろ湯たんぼ的な物を買つべき
か……ん？」

「何だ？ 何だかあったかいものが……『ギョッ』……え？」

「捕まえたぞあにきィ……」

「んな！？ 雫がどうして俺の布団に……っ！」

うおおおお……今度は俺が忘れてた……！
何という事だ……。

「今日もいっぱいくっつくこうな」スリスリ……
「……もう勝手にしてくれ……」

眠い。
疲れた。

もう一々雫を叱るのが面倒くさい。

……寝よう。

「（……あれ？ 兄貴が全然怒らない？）どしたの兄貴ー？」

まったく、今日も疲れたけど、明日は聡里と美咲ちゃんに事情を聞かないと駄目なんだよな……。

もしかして今日以上に疲れたりするの……？

駄目だ。これ以上辛い事を考えるのはやめよう。

……さつきから雫がうるさい。

俺は寝たいんだ。静かにしてくれ。

「ねー兄貴ー。どしたー？ あにk『ムギユツ』んにゆめゆっ……？」

抱きしめてやったら静かになった。

これでやっと眠れる……おやすみ……。

あつたかい。

今あたしは兄貴に抱きしめられている。

風呂からあがってからそんなに時間が経って無いから兄貴の体が
すごくあつたかい。

ちなみに今のあたしの体勢は、あたしの頭を兄貴が前から抱きし
めていて、あたしの顔が兄貴の胸に当たっている状態だ。

……正直まずい。

なにがまずいのかと言うと、兄貴の体からすごい良い匂いがして、
頭が真っ白になりそうだからだ。

しかも兄貴はたまにあたしの頭や背中を撫でたり、耳元であたし
の名前を呼んだりするせいで余計に思考が出来なくなる。

「はぁ……栗……」

「ふみゅっ!？」

耳元でささやかないでえ!？ 名前を呼ばれるのにもクルけど、
息が当たるせいで背筋がすごいぞくぞくするから!

「ん……ふふっこんなに可愛くなって……」なでなで
「ふわ……」

もうだめだ。

襲おう。

兄貴を襲おう。

美味しく頂こう。

幸い今は寝てるし隙だらけ…『ギユムッ』

「ぶぐお!?!」

う、ちょっとあれな声が出た……。

うー……。お兄ちゃんがあたしを抱きしめてるせいで、身動きが取れない……。

抱きしめられるのはいいんだけど、これじゃあお兄ちゃんの初めてが食べられないよ……。

そうだ。

いただきます。

美咲ちゃんにファーストキスは奪われたけど、お兄ちゃんの貞操はわたしがいただきます!

とりあえず頭を自由にする!

一気に力を込めたら抵抗されるかもしれないから、少しずつ頭を離して片手でお兄ちゃんの腕を外しながら……っと。行けた。

それじゃあ早速……!!

「んー…、震………」にこっつ

ポッ

お兄ちゃん、その笑顔は反則だよ……。
あたしの心の汚さが目立つちまうじゃねーか……。

……仕方ない。

「寝込みを襲うのはやめるけど、いつか絶対にあたしのものにしてやるからな？ 兄貴」

手ごわい敵が多いけど、それでもあたしが兄貴の一番になって見せる。

「今日はこれで勘弁してやるよ……」（ちゅっ）

兄貴の唇に自分の唇を少しの間重ねてから、あたしはあにきの胸に顔をうずめた。

これはあたしだけの特権だ。あいつらには渡さねー。

兄貴もまたあたしを抱きしめてくれるし、あたしからも兄貴の背中に腕を回して抱きつく。

……すごい密着したせいで兄貴の心臓の音が聞こえる。

兄貴の体温。

兄貴の匂い。

兄貴の息使い。

あんしんする……。

「ぜったいに……あたしがあにきのいちばん……になって……」

あーき...だーすき...。

兄貴とあたしの二度目の夜（後書き）

こんなクオリティですまぬ…すまぬ……。

実に無様…！ 圧倒的無様…！

感想ももらえたのに不甲斐ない……。

俺と記憶と二人で鍛練（前書き）

作者は夢を見た。

どこの国かは分からないが、日本では無い事は確かだ。

少し細め下り坂が延々と続いていて、道の両脇には沢山の家がある。

…ふと何かの音が聞こえてきた。

作者が振り返ってみると、作者のいる更に上の方の道から3人の男が現れた。……何故かスケボーに乗って。

そっとう競技中なのだろうか？

どうやら自分は幽霊のようなもので、三人を宙に浮きながら追う事が出来るらしい。

1・2分追いかけていると、後ろから黒い霧の様な物が来た。

それがなんなのか暫く見つめてみると男たちが“それ”に気づいたらしい。

「おい！ 来たぞ！！」 「分かってる！ 全力で行くぞ！！」

「ちくしょう！ まだ追ってくるのかよ！？」 「いいから逃げるぞ！」

男たちは先ほどよりもはるかに速いスピードで走り続ける。

表情もかなり真剣だ。

そして、その時突然頭に知識が流れ込んできた。

『この男たちは、ただ蜂の集団から逃げているだけである』

無駄にアクロバティックな動きをしながら逃げて行く男たちの背を見送り「ええ」と夢を見始めてから初めて声を出して…

そこで目が覚めた。

実際に、小・中・高・そして今回の分を足して4回、この夢を作者

は見た。

俺と記憶と二人で鍛練

『十夜…君に大事な話があるんだ……』

『驚くかもしれないけど、最後まで聞いて頂戴……』

『だいじなはなしってなに？ おとーさん。おかーさん』

この声は…父さんと母さん……？ 子供のころの俺の声もするな。
これは…夢、か……？

『あのね…、十夜は…僕とアリシアの实の息子じゃないんだよ……』
『…？ どういうこと……？』

ああ、そうか。これはあの時の記憶か……。

『ごめんなさい。本当はもっと十夜が大きくなってから話すつもりだったの……。でも、昨日言った通り、朝一さんは外国に行ってしまうでしょ？ 十夜と面と向かって話せる内に話しておく事にしたの。下手にズルズル引っ張って話せなくなったりしたくも無かったから……』

『えーっと……、ぼくがおとーさんとおかーさんのじつのむすこじやないって、どういうことなの？』

もう何年前の記憶だったか……。

親父がまだ日本にいたのはかなり昔だったから、確か俺がまだ幼稚園に行っている頃だったか？

最低でも10年以上前の記憶だなこりゃあ……。

『あのね、十夜。あなたは…ね、本当…は…ううっ』

『アリシア、僕が言うよ。…十夜。君の本当の親は…僕達じゃない。』

君は……僕の親友の子供なんだ』

泣き出してしまった母さんの代わりに、父さんが決定的な部分を言った。

……まったく、何で今更こんな物が夢に出るんだか……。

『えーっと……じゃあぼくのほんとうのおとーさんとおかーさんはどうなったの？』

『っ！ 君のお父さんとお母さん……くろかみまこと黒神真と、くろかみみはる黒神美春は……死んじやったんだよ……。交通事故でね……。もう、会えないんだ……』

『……なんで、ふたりはぼくにそのことをはなしたの？』

……。

『そうだなあ……。君に、嘘をつき続けるのが出来ないと思ったからさ。……どっちにしる僕の弱さ、かな。僕が遠くに行く直前になってから話すなんてね……』

『あなた！ そんな事言っちゃ……』

『いいや、アリシア。これは……まごう事無き、僕の弱ささ。……本当にすまない、十夜……。僕は、君の父親失格だよ……』

『……おとーさんは、よわくなんてないし、ぼくのおとーさんだよ……』

『っ！……まだ、僕をお父さんと呼んでくれるのかい……？』

『だって、ぼくはほんとうのおとーさんもおかーさんもしらないんだもん。ぼくのおとーさんとおかーさんは、いままでいっしょにくらしてきたふたりだけだよ』

『そうか……ありがとう。本当に……ありがとう……！』

『ありがとうね……十夜……！』

父さんと母さんは完全に泣き出してしまったようだ。

『おとーさん…おかーさん…ないてるの……？ どこかいたいの？』
『うふふ…十夜、大丈夫よ。痛い所なんて無いわ。私達はね、嬉しくて泣いてるの』

母さんが、涙を流しながら美しく笑った。父さんは何か言おうとしていたけど、今はそれすら出来ないほどに号泣してしまっている。

思えばこの時の母さんの笑顔は、雫の笑顔によく似ている。

やはり雫は、母さんの娘なんだなあ…と、今更ながら思った。

『えっとね……おとーさん、おかーさん。これからあらためてよろしくおねがいます』

『うう…グスツ…十夜…！ うん！ これから、また、よろしくね』

『……』
『うふふ…あらあら、十夜ったら一体どこでそんな言葉覚えたのかしら』

……やっぱり、俺の父親と母親はこの人達しかいない。
胸を張ってそう言えるんだから、それで良いのだろう。

「やはり夢、か……」

本当に懐かしい夢を見た。

そつえば最近両親に電話してないな……。

久しぶりに電話してみるか……。

まあそれは学校から帰ってからにするか。朝はあんまり時間が無いしな。

夢の内容についてだが、雫には話すべきなのだろうか？

確か雫には、俺が家族の中で誰とも血が繋がっていない事を知らない筈だ。父さんと母さんが俺に話した時、雫はまだ小さかったしあの時は眠っていた筈。

……まあ聞いていたとしてもあの娘の記憶に残っているとは思えないしなあ……。

んー…、話すべきか、話さないべきか……。

待てよ？ もし雫が俺と血の繋がりが無い事を知ったら……。

『あたしと兄貴とは血が繋がってない…？ ツ！？ だったら、あたしは兄貴と結婚出来るんだな！？ よっしやあ兄貴！ あたしと結婚しよう！ 血が繋がって無いんだったら大丈夫じゃねーか！』

おつふ。何とありえそうな未来……。

こりゃ話さない方がいいか……？

まあなんにしても、父さん達に聞いてからだな……。

とりあえずは起きて、今日の鍛練に行くとしよう。

「さつてと……あれ？」

布団から出ると、雫がいない。何故だ？

いつもならまだあいつは寝てる筈……

「あ、兄貴。やっと起きたのかー？」

あ、いた。しかももう着替えてる…？

「何でお前もつ起きてるんだ？ いつもならまだグースカ寝てる筈だろ？ 俺を起こす必要も無いし……」

昨日も結構早くに寝たからな。おかげでスッキリした目覚めだし。

「それはな……今日からはあたしも、兄貴と一緒に朝の鍛練に参加するからだ!!」

へー……え？

「何で……？」

こいつがまともな理由でこんな朝早くから起きるだと？ ありえない。俺が雫を嫌いになる事ぐらいあり得ない事だ。俺は雫が大好きだからな！

……話がずれた。とりあえず本人に聞いてみよう。何故鍛練に参加するのかを。

「何で鍛練に参加する気になったんだ？ 今まで『朝早く起きてまです体を動かすのは嫌だ』って言ってたじゃないか」

「そんなの兄貴と少しでも一緒にいたいからに決まってる？（兄貴を狙う泥棒猫も増えたし（聡里の事）、あの美咲も兄貴のファーストキスを奪いやがったんだ……、少しでもあいつらより長い時間兄貴と一緒にいて優位に立っておかないとな……）」

やっぱりまともな理由じゃ無かった。

一緒にいたいただけって…、そりゃ嬉しいっちゃ嬉しいがなあ……。

「そんな理由で参加されても、正直付いて来られるのか怪しいけど大丈夫か？ それに体を動かす以上どうしても多少は汗もかくし、朝から二人シャワーを浴びてたら時間もきつくなるんだが……」

別に参加自体は良い。寧ろ雫が理由はなんにしるやる気になってくれて嬉しいほどだ。

でも、どうしても時間がなあ……。俺一人でも結構時間がかかるっつのに。

「何言ってるんだよ。あたしを起こすのに使う時間が無くなるんだから、その分の時間を考えたらあたしがシャワー浴びる時間ぐらいにはなるんじゃないか？」

……そういえば毎日雫を起こす時、程度の差はあれど結構な時間が掛かっていたような……。

しかも起こした後また二度寝しないように声を掛けたり、どうしても目が覚めない雫にコーヒーを入れてやったりした事もあるから、もしかしてそれが無くなったら雫のシャワータイムぐらいにはなる……か……？

「分かった。でもなるべく早くシャワーを浴び終われるようにしないと駄目だぞ。俺が好きでやってるだけの鍛練だからな。それに参加させて遅刻なんてさせたくないし……」

「んな事分かってるよ。あたしだって別になんの考えも無しに参加する訳じゃねーからな（嘘だけど）。でも兄貴はカッコいいなああたしの為に鍛練してる癖に、それを『好きでやってる』だなんて

… ああ、こんなにカツコいいから他の女どもが釣られて行くんだよ。
… そりゃあたしの事を大事に思ってくれるのは嬉しいけどさ」

なんか雫のかおが赤くなつた…？
もしかして熱でもあるのか…？

「お前風邪とか引いてないだろうな。 …… ちょっと熱測るぞ」ピトッ

雫の額に俺の額を当てる…… ふむ、別に風邪を引いてるわけでは
ないっばいな……。

「んな！？ いきなり何すんだあ！？」

「いや、顔が赤いから熱でもあるのかと…… っておい、さっきよりも
赤くないか？ 熱があるなら鍛練は止めておいた方が……」

そのせいで風邪が悪化なんてしたら目も当てられんぞ……。

「う、うるせー！ さっさと鍛練行くぞ！？ あたしは先に外行く

から、兄貴も早く来いよな！！」ダッ

「ちよ、待てって！」

全く…… まああれだけ元気なら大丈夫か。

すぐに着替えた俺は、雫を追って外に出た。

さて、今日も頑張りますか！

俺と記憶と二人で鍛練（後書き）

十夜爆発しろ。

……いや待て！ 俺と変わるんだ！！

あ、前書きのあれは事実ですよ？

4回見たって所も本当です。

ちよつと前書き長過ぎたかな……でも実際に見た事だし、今回の話が夢から始まるからな……。

感想で指摘されたミスを修正
なんという致命的ミスorz

俺と妹とやっちまったorz(前書き)

誰だって一度はあのネタを使いたいと思うじゃない？

……あれ？ 俺だけ？

俺と妹とやっちまったorz

タツタツタツタツタツ……………

「つたく… 雫は本当に先に行ったのか……………」

あいつは俺のランニングルートを知ってるからなあ……………。
俺が雫より早い速度で走らないと追いつけないかもしれない。
何か照れてみたいだし、妙に頑固な所がある雫の事だ。自分から速度を緩めるなり止まって俺を待ったりはしないだろうなあ……………。
まあランニングルートを教えたの俺だけどさ。ってか俺しかないし。

でも『兄貴と少しでも一緒にいたい』って自分で言ったくせに何で先に行くんだか……………。

「ま、ちゃんと走ってるんだっいたらあいつも鍛えられるし別に良いかな…………… って、あれ？」

噂をすればなんとやら。

雫発見！…………… って誰かいるのか？ 雫の背中と重なって見えなけれど、どうやらもう一人別の人がいるらしい。…こんな朝っぱらに他の人が……………？

「だから！ あんたは兄貴とどういう関係なんだよ！？」

「あらあら。それは、ひ・み・つ」

「グギギ…くそ！ いいから教えろってんだよ！」

「あら、女の子がそんな言葉づかいじゃ駄目よ？」

この声と話し方はもじゃ……。

「……って、やっぱり静音さんか」

「あら〜十夜君じゃない。今日もランニング？ 関心ね〜」

このセリフも正直言って聞き飽きた。このセリフあつての静音さん、って感じすらするぐらいの回数は聞いたからな……。

「あー！ 兄貴！ この女とどういう関係なんだ！？ こいついきなり『あなた、十夜君の匂いがするわね？』とか言ってきたんだぞ！！」

ええ……

「べ、別に特別な関係じゃねえよ。この人は響ひびき静音しずねさんって言うてな？ 何度かランニングしている時に出会って、それから良く話すようになったってだけだよ」

「ほんとーかあ〜？ 嘘付いてたりしねーだろうな…？ もしついでたらただじゃおかねーぞ……？」

「何も嘘はついてねえよ。この人は朝話すだけで、他に何も無いって」

本当に嘘はついて無い。

そもそも話と言っても、毎回そこまで長い問話してる訳でもないし。

「んー……分かった。あたしは兄貴を信じる！ 未来の旦那さんを信じるのは当たり前だからな！」

「……色々突っ込みたい所があるが、とりあえず信じてくれてアリガトーゴザイマス（棒）」

「兄貴好きだー！」ぎゅっ

そんな事をこんな朝早くに叫ぶなそして抱き付いてくるな!?

「あらあら、わたしを無視するなんて二人ともひどいわ〜?」

おっと、静音さんを蚊帳の外にしてしまった様だ……。

「ああ、すいません静音さん。こいつは俺の妹で……ほら、ちゃんと自己紹介と挨拶しなさい」

「う、分かったよ……。あたしは兄貴の妹で聿って言うんだ。……別によるしくしなくていい」

「おいコラ……すいません静音さん……ウチの妹が……」

聿の奴……何でこんなに喧嘩腰なんだ……?

「あら、別に気にしてないからいいわよ……。……それより、妹なのに何で『未来の旦那さん』だなんて言ってたのかしら……?」

あれ? 何だか雰囲気が……?

「それはなー! あたしは兄貴の事が好きだからだ! 何か文句あるか!?」

「うふふ〜別に文句なんて無いわよ? ……でもね、どう足掻いても血の繋がった兄妹である限り結婚はできないわ。残念だったわね?」

何か静音さんが完全に別人っぽいぞ!? 何があっただんだホントに!?!?

いつもの反対で凄く冷たい雰囲気が滲み出てきたんだが……。凄

い怖い。

「あ、あの…静音さん？」

「ッ！ ……あ、あらあら〜十夜さん。そんなに怯えてどうしたのかしら〜？」

ん？ 雰囲気がいつものほわ〜って感じに戻った……？

というか

「あの……今何か静音さんの雰囲気が「あら大変。わたし少し用事を思い出したわ〜？ ごめんなさい十夜さん。今日はこれでさよならね〜。 ……あ、栗ちゃんもまた今度オハナシしましょうね？ それじゃ、また明日〜」ヒラヒラ

少し早口でそれだけ言うと思ったら早さんは行ってしまった。

用事って…こんな早朝から……？

「ふん！ あたしは別に話す事なんて無いけどな！！」

だから何でお前はそんな喧嘩腰なんだよ……。

しかしさつき静音さんが最後の方に言った『お話』の部分に違和感があつのは気のせいか……？

いや、何か深く考えたらダメな気がする。これは忘れよう。

何だか静音さんは少し焦っていた様子で行ってしまった訳なんだが……何をそんなに焦ってたんだろ。もしかして結構重要な用事があったのだろうか……？

「まあそれはいいか。……じゃあ雫、ランニングの続きするぞー」

「おう兄貴！一緒に走るぜー！！」

「だから叫ぶなっての。今はかなり早い時間何だから近所迷惑にもほどがあるだろうが」

「う、ごめんなさい……」

「分かればよろしい」

そんな会話をしつつ、俺と雫はランニングを再開した。

○

「ふう、ただいまーっ」と

「ゼエ…ゼエ…ゼエ…兄貴、何でそんなに…余裕そうなんだ、よ……」

「フ、それは毎日の積み重ねの差が出たのさ。お前が寝てる間に俺は走ってるんだから当たり前だろう」

「別に朝のランニング自体は他にもしてる奴いるだろうけどさ、兄貴ほど早く走ってる奴はそんなにいないと思うけどな……」

ま、そりゃそうかもしれない……。

俺と雫はランニングを終えて家に帰ってきた。

鍛練？ あれは雫がシャワーを浴びる時間を考えて無しにした。

やっぱり時間足りなかったよ。……早く気付いてよかった。

「それじゃあ俺が先に入るぞ？ 汗臭いまま料理するのも嫌だからな」

「おー分かった。あたしは待ってる」

ん？ 随分素直に聞くなあ……女の子だしもう少し何か言ってくると思ったんだが……。

俺が料理の事を考えているのに気づいていて譲ってくれたのか？
だったら良いんだが……。

まあ考えてても仕方ない。さっさと入ってさっさと上がるとしよう。

○

ジャー……………

「あー…やっぱり汗をかいた後のシャワーは良いなあ……………」

できるなら風呂の方が良いけど、流石にそれは勿体ない。水道代的にも時間的にも。

「さて、さっさと頭洗って料理をしないて」「あにきー！」「うおおお おおおっ！？」

「あたしも一緒に入るぜー！」

あ…ありのまま 今 起こった事を話すぜ！

『俺はさつきまで1人でシャワーを浴びていたと
思ったらいつのまにかいつのまにか妹がいた』

な…何を言ってるのか(r y

「おい雫お前何でいるだよおおおおおおお！？」

「えへへー、いいじゃねーか水着付けてるんだしょー」

あ、本当だ。水着付けてるじゃん。だったら別n

「って水着付けててもダメなもんはダメだろうがア！」

「うっせー！ あたしは兄貴とシャワー浴びるんだー！！」ギョッ

ちよっ何がと言わんが当たってる！ 当たってるから！？

「おまつ抱きつくな！？ 離せエ！！」

「やだー！ おにーちゃんといっしょにしゃわーあびるー！」

「微妙に幼児退行してるんじゃない！ だいたいお前が水着付けても俺が裸じゃねーか！！」

「だったら兄貴も水着があれば一緒にいていいんだな！？」

……………あ。

「やっちまった……………」

結局一緒にシャワーを浴びるはめになりました。

まあ一緒にシャワー浴びただけで、他には何も無かったけどさ…

…。

「ズーン

……」ニコニコ

でもさ、正直やばいよねコレ。

下手したら風呂に入ってる時に乱入されるかもしれない。

水着着用ならおくみたいなさ言っちゃったし……どうしょ……。

とりあえず朝飯作りますか……。

人それを現実逃避と言う

俺と妹とやっちまったorz(後書き)

— 1、6 j /、イ /—
— …!、ノ / u … / / へ
— リ u、ノ | !V 八 —
f t、ル、イ、e ラ、タ人。
— 1、6、ノ、>、t i>
、 i Lレ u、— りト八 .
ハ !ニ、ノ、V ……、
/ ……、T、 / u、 | / ……、 /、、

ポルナレフさん

もしずれててもそれは仕方のない事さ……。

俺と妹と未来への不安（前書き）

サブタイトルとか内容とか、色々難しいゼヨ……。特にサブタイ。

今回はあんまりパツとしない話です。いつもの事だけどねー。

俺と妹と未来への不安

「よし！ ごちそうさまでした！！」

「……お粗末さまでした……」

たった今朝食が終わった所だ。

終わった…所だ……。

「…？ 何で兄貴はそんなに元気がないんだ？」

「お前のせいで俺は未来に不安しか無いんだっつーの！」

主に今日の入浴時についてな！

「えー…、こんな巨乳で金髪美少女に抱きつかれてその反応かよ」
「自分で言うな、自分で。……お前は妹なんだからお前が望むような反応はしちゃダメなんだよ」

妹に反応するとか兄としてダメに決まってるだろ……俺と血は繋がって無いけど。

しかし、まさか雫がここまで大胆な行動を起こすとは思っていなかった。

まあ水着を付けていたのは良かったんだが、それでも高校生にもなって兄妹と一緒に風呂…今回はシャワーだったけど、入るのは駄目だろう。常識的に考えて。

これは本気で雫に本当の事（俺と血が繋がっていない事）を話すのは駄目かもしれんな……。

「おい、兄貴ー？ また考え事かー？」

雫が俺に対して抱いている感情を無くすのは流石に無理だろうし、やっぱり今日学校から帰ってきたら父さんと母さんに電話した方がいいか……。近況報告も兼ねて、雫の事を相談しよう。

……。あ。

学校と言えば今日聡里に色々聞かないといけないんだ……。ちくしょー……。何かやる事多すぎだろう……。何で俺がこんな目に遭うんだ……。

「おい兄貴。無視か？ 未来の奥さんを無視するのか？」

そりゃ女の子、それもかなりの美少女2人に告白されるのは嬉しいぞ？

でもなあ……。片方はずっと一緒に暮らしてきた妹で、片方は何だか目に光が無い状態での告白だったし……。

そこからもしかしたらもう一人追加される可能性があるんだぞ？ それも何年か親友だと思ってた男装美少女（僕っ娘）。

混乱するのも無理は無いと思うんだよなあ……。これが他人に起こった事なら「リア充爆発しろ！」って言うってぶん殴るんだが……。

大体あいつらも何で俺みたいな男なんか好きになっただんだ？

俺のいいとk「兄貴イー！」うお！？

「な、何だよ雫。いきなり怒鳴らなくてm「いきなりじゃねー！ さつきから何度も呼びかけてただろうが！」「そう……だったのか……？ それは、その……すまん……」

ああ、どうやら思考に気を取られ過ぎたらしい。

現実には目を向けると、元々キツメだったのが更に釣りあがった目
つきの雫が目の前に……って、近い！

「兄貴…どうせまた他の女の事考えてたんだろ……。兄貴はあたし
んだからな！ このツ」ガバツ
「んむ！？」

ちよっ！？

「うぐぐ…ぷは！ い、いきなり何をする！？」

「何って…キスに決まってるんだろ？」

「いやいやおかしいから！ 今の話の流れでキスはおかしいから！
」？

「はん！ 他の女の事なんて考える兄貴が悪いんだよ！！」

どういうことだってばよ……。

何だか相変わらずな雫を見てみると、さっきまで悩んでいた自分
が馬鹿らしくなってきた……。

「はぁ…もう学校行くか……」

もうあれだ。深く考えるのは止める！ 変に考え過ぎるから余計
に疲れるんだよ。

もうここは当たって砕けるしかあるまい！！（思考放棄）

というか、俺もう疲れたよ……。

「えー…。もつとイチャイチャしたかったのになぁ……」

「なんかさ、お前どんどんキヤラ変わってきてないか……？」

ここまで俺にべつたりでも無かった筈なんだがなあ……。

「はあ…やっぱり兄貴は鈍感だよなあ……」

む？ 何を言うんだ。俺は結構敏い方だぞ？（自分に対する殺気とか悪意とかに）

「（絶対違う事考えてるな…）…まーいいや。じゃあとつと学校行こうぜー」

？ 何でそんなに呆れた目を向けるんだ……？

○

「さて、学校到着つと」

今日も面倒な勉強が始まるぜ。勉強嫌い。

「あ、十夜。おはよう」

お、聡里。

「おはよう聡里。あるんだが…いいか？」

それよりも、今日部活で聞きたい事が

「……分かった。僕も君に大事な話があるから、どこか二人きりに

なれる所に行こう。……今は時間がそんなに無いけどいつ、どこでする？」

ん…そうだな…人があまり来ない所が良いだろうし……

「よし、だったら昼休みに屋上はどうだ？ あそこなら人は来ないだろうし」

「屋上？ あそこは鍵が掛かってて開かないんじゃないのかい？」

まあ普通はそうなんだが……

「あの鍵は簡素な奴だからな。……ピッキングで開けられるんだよ」

もちろん後半は小声だ。流石に一介の高校生がピッキング出来るなんて言えんからな。

本来入ってはいけない所に入る訳だし。

「ピッキングって君…まあいいか。それじゃあ昼休みに屋上だね？ 了解したよ……結局は一緒に行くだろうけどね」

「おk、勿論弁当も持って行くだろ？ 飯を食いながらの方が間がもたない時も飯食ってたらいいし」

もしもの時を考える、やり手の十夜と呼んでくれ（キリッ）

「どう考えても他に二人きりで話せる時間が無かったただけだよね…

…」

それは言うな…。放課後とかは雫と美咲ちゃんに見られたりする可能性が高いからな……。

あの二人の事だ。もし俺と聡里が二人して来るのが遅かったら探

しに来るに決まってる。

俺と聡里が二人きりでいたら何をされるか……（ガクブル）

「おーしお前ら席につけー。HR始めるぞー」

ん、ティーチャーが来たか。

「じゃあ十夜、また昼休みにね」

「ああ、また昼休みにな」

さてさて、どうなる事やら……。

俺と妹と未来への不安（後書き）

さて、次回は聡里と話し合いじゃよ。

別に大して見どころがあるわけでもない。

ちなみに、十夜も薄々聡里に好意を持たれてるのには気付いてます。

何か最近頭痛とか酷いだが風邪だろうか……。

俺と聡里と話し合い・・・？（前書き）

ヤヴァイ、風邪のせいか執筆が追いつかなくなってきた……。
頭が痛い。何より元々弱い腹が風邪のせいでさらに不安定に……。
泣）

俺と聡里と話し合い・・・？

キーンコーンカーンコーン……………

やっと授業が終わった…。

俺が嫌いな英語が…やっと終わった…。

「おーしお前らー、今の問題集の続きは宿題にするからなー？」

『えー？ 何でだよ…』 『面倒くせーなあおい』 『何でこんな
のしないと駄目なのよー』

生徒から野次が飛ぶ。…まあ当たり前的事だろう。誰だって宿題
は嫌だし…………。

「はいはい文句は受け付けませーん。授業の進行が遅いので仕方な
い事だからなー」

それは授業中、すぐに話がそれたりするあんたが悪いだろうが…
この不良教師め…………。

「おーし瀬川ー」

え？ 何だ？ いきなり俺の名前を呼ぶなんて…話の流れが掴め
ないんだが…………。

「お前いらん事考えた罰だ。この後俺の資料整理の手伝いをしろ」
「ちよっと待てい！ この後昼休みだろうが！ 俺の食事時間をど

うするつもりだ!？」

というか人の思考を読むんじゃない! 真剣に怖いっつーの!

「っつて言うーか俺は昼休みに用事があるから無理です!」

「あぁー? お前普段は明石^{あかし}と飯食ってるだけだろ? 何で用事があるんだ?」

「え? いや、それは……」

えつと……『聡里に俺の事どう思ってるか聞きに行く』なんて言えないよな……どうする……?」

「まあ用事があるなら仕方ないなあ……。よし、だったら今日は良い。でもまた後日に俺の仕事を手伝ってもらうぞ? 俺に失礼な事を考えた罰だからな!」

うわぁ、この人もしかして本当に俺の考えてた事分かったのか……?」

しかも何で別の日にずらしてまで俺に罰を与えようとしてんだよ……。

「そりやお前美人教師である俺に失礼な事考えてたからに決まってるんじゃないかよ!」

「だから俺の思考を読まないでくださいよ! ……っつていか何で分かるんですかねえ!？」

怖いっつて! 具体的に何を考えてるのかすら分かってそうなんですよ……。

「なんでっつてそりゃ……勘だ!」

○

「へー、屋上ってこんな風になってたんだね」

「おう、一応柵の方には行くなよ？ 老朽化してたら危ないしな」

「分かったよ。それでどうするんだい？ このまま腰を下ろしたらズボンが汚れそうなんだけど……」

ふっ、この瀬川十夜に抜かりは無いぜ。

「ちゃんと敷物は持ってきてるのさー！」

「おおー……まあ言い出しっぺが用意するのは当然だけどね」

そんな冷めた反応されると辛いんですが……。

「じゃ、話し合いといこうか？ 十夜」

……分かってるよ。

「話つつてもさ、俺はただ、一つだけ質問がしたいだけなんだよ。

あのね

キーンコーンカーンコーン……

「あー…だる……」

歴史の年数なんて覚えても使う場面なんかねーだろうによ…マジで意味が分かんねー……。

他の勉強にも言える事だよなー…こんな事習っても社会に出て役に立つのか？ あたしは立たないと思うんだけどなー……。

「あのねえ雫ちゃん。例え授業で習った事をそのまま使う機会が無かったとしても、それで得た色々な考え方が役に立つ時はきつとある筈よ？ だから今ちゃんと勉強しないと社会に出て孤立しちゃうんじゃないかしらー？ まあ流石に孤立は極論なんだけどね？」

ん？ 美咲か……

「何であたしの考えてる事が分かるんだよ……」

「あなたさつきから考えてる事口に出してるじゃない……」

そうだったか？ まあどうでもいいか……。

「あたしが本当に孤立する事なんてありえないしな」

これは絶対の自身を持って言えるぜ。

「あら、その理由を聞かせてもらえるかしら。随分自信があるみたいだけど？」

「そりゃお前…あたしには兄貴がいるからなあ……えへへ」

あたしは将来兄貴と結婚するし、兄貴がいればあたしが孤立する事なんてありえねーからな！

あー…兄貴は今何してんのかなー…。兄貴に抱きつきたいなー…。

「（小声とはいえ教室でそんな事言うだなんて…というか前より積極的になってる？ 不味いわね…私が十夜先輩にキスした影響を受けたのかしら…）雫ちゃん忘れてないかしら？ 私だって十夜先輩を狙ってるのよ？」

「ふん！ あたしと兄貴は一緒に住んでるんだぞ？ 美咲にも聡里にも負ける通りはねーよ！…はあ、兄貴に会いたいなあ…押し倒したい…。」

兄貴アニキあにきい…。

「…はあ、そんなに会いたいなら会いに行けばいいんじゃないの？ 教室は知ってるんでしょ？」

お前天才か

「おっしゃ！ 兄貴に会いに行くぜ！ ついでに一緒に弁当食べるんだー！」ダッ

「ちよつと！？ 私だって先輩には会いに行くわよー！」

待ってるよ兄貴！ すぐ行くからなー！！

○

「あかさ お前は、俺の事どう思ってる……?」「
「真剣な顔して何を言うのかと思えば……好きだよ? 寧ろ愛して
ると言っても良いくらいにね? ……フッフ。薄々は分かってたん
でしょ? 昨日の部活でそれっぽい事は言っただしさ」

やっぱりそうか……

「お前も俺の事……」

「やっぱり、分かってはいたけどそれだけか……。僕に対する告白
だったらいいなーって思ってたんだけどねー」

えっとその……

「ごめん」謝る必要はないよ? これからは積極的に君を狙って行
くからね」ええ……」

なにそれこわい

「その第一歩として…ま、とりあえずは君の唇を貰おうかな? こ
のままじゃスタートラインにすら立ててないしねッ!」

え、ちよつむぐツ!?

「ん…ちゅ…んむ…」ギョッ

「むぐ…ん…んう…」

またいきなりのキスとは…!

「ん…ぷはっ、はぁ……」ちそうさまでしただね。…フッフ」

「ぶはっ…はあ、何でお前らは皆無理やりなんだよ……」
「それは勿論、君が許可をくれるとは思えないからさ」

そりゃそうですか……

「俺にだって気持ちの整」「兄貴（先輩）…何してんだ（）してるんですか）……？」え、？

この声はまさか！？

「おい聡里イ…お前兄貴に何してるんだア……？」
「この泥棒猫…先輩の唇を……」

またこの流れか。

俺と聡里と話し合い・・・？（後書き）

実は担任は女（美人）でしたっていうね。

さあ、我らが主人公はまたまた現れたこの修羅場をどうくぐり抜けるのか…！

次回に続く！ みたいな。

もしかしたら更新速度が落ちる可能性があります。ご了承ください。
……すまぬ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3253y/>

俺の妹はヤンキーっばい美少女である

2011年12月11日12時54分発行